

丙子雜俎

青春追憶記

昭和十一年五月下旬起筆

六

特別
14
1919
477



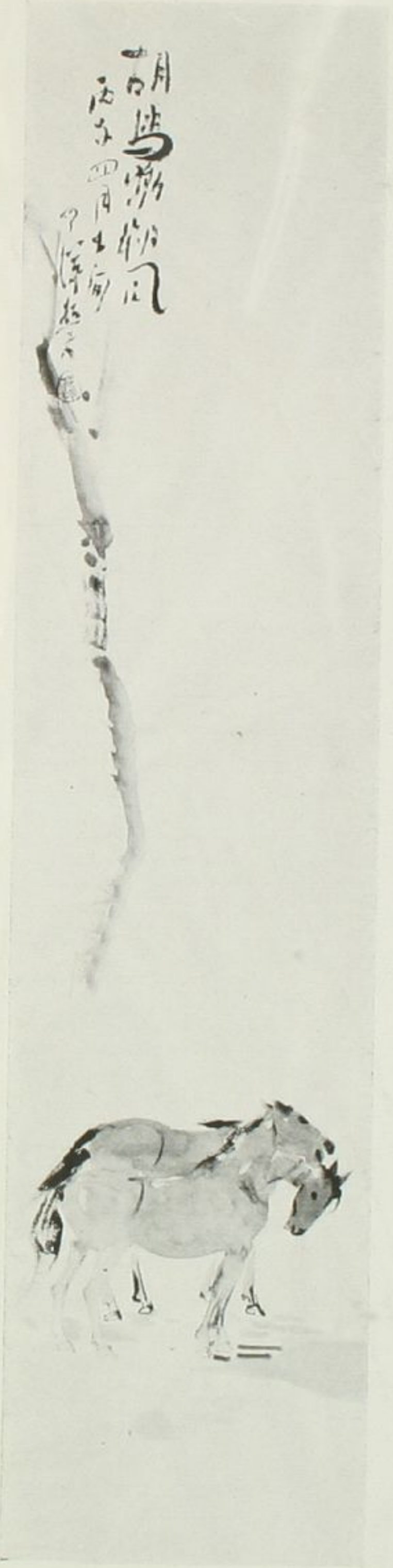
176742

丙子雜題

昭和十一年五月下旬迄筆

〇咳軟二悩んか二三〇病差をあるか酒も飲めず喫煙
 七出果多のいひ無聊を極くす枕頭の飛ぶ法を後人
 多ううレオを極へりししてヤツト時を移ししみるこ
 ニ十時の池筆を書き比いと思ひても、筆七運ハ
 主、思極目纏す、童物、唯此ヒヨツト胸に流人ハ
 ことを矢贈書きつけておく。

華族と云ふもの概強レワンボウルと云へん、云ひ
 過るこも知んか、實際人々貴めさとも知つてお



群馬

野澤如洋

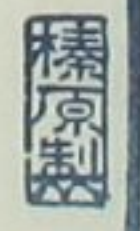
男が人々物を誇ることはいちまの人の馳馬の如きとい
い何人も思はずの我が自人の人を馳走するにこそ
らう大なる名を己下へ物獻上を受けり
ことと懐くものい、その人が懐くものうへを
あせり、人に物を誇ることを、人のあつて
あふ、えんも、見えん、ことをすまひ、及ぶ
と思へての故か、人に物をやつたは、
一、その、女の实例に多き、懐くものを、
族としての家庭の教育の、物と他人の
ことを、細心の時、教へ導き、必に、あつて、
七、そのレコ、鉄軌のレコ、ボウに、する、
一、昔、一、望胎を、す、業と、一、は、監、あつて、

中條とて、望胎の者、七、公、許、こと、う、
か、す、実、成、見、の、行、は、れ、た、此、の、業、者、の、招、牌、
課、の、類、の、文、や、俗、を、考、へ、ん、た、も、あ、つ、た、由、
自分、が、興、味、を、も、つ、て、進、み、子、持、得、の、俗、
を、考、へ、ん、た、い、た、ゆ、へ、も、あ、つ、た、い、た、事、
と、并、べ、し、い、た、女、も、あ、つ、た、い、た、事、味、七、分、か、
品、の、よ、い、な、道、地、と、思、へ、ん、た、

一、柳、河、保、重、倫、が、一、方、の、前、死、ん、だ、女、の、人、の、葬、族、
中、に、と、相、あ、つ、た、時、か、あ、つ、た、保、陰、道、料、理、を、が、
行、ひ、の、葬、族、が、あ、つ、た、時、早、大、の、教、授、も、あ、つ、た、
こと、が、あ、つ、た、事、を、交、へ、り、あ、つ、た、事、を、
氣、が、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
氣、が、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、

主折洋元祖の次男があることだ。身前の多病
の満身より一室より出るべき人物だ。自分より
二三才若いから成底の親多に在りて其の
兒をあらは言が、去るの故に志馬と曰くはあつた
禪心。

一 此の夜分放逐せし二日後に佛法僧の教を以て
此の三河必風来寺の法谷の機軸を以てりしけり
此の鳥の教を捕へて放逐すべしと云ふことだ
かみつる舞の二十分位河あさき鳴くその
教のハブのボウ、ソウも聴くか。深夜此の
目撃する教の心をきく物まこと感ぜしる
ふくもし。も教うのおせりいかにえら馬はあ



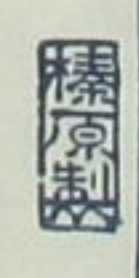
るか形貌をえしこといふ。先二角復うりし
谷の鳥の教を聴くこといふ。

一 高野山の法淨心院から釋尼慧暢の廿二回忌
の夜かくるにことを報してきた。此の院に在りて
七三あるに三女むせあ大男のを卒業しはばあか
死んどの。愛惜を地くうのか今存人長んか院に
四十二位の没せんもある。此のこといひ出まか
此の不幸のあつた時、自分も他と不幸が
あつた。一方の死ふ一方の生別か、人も別後廿三
年を経る。其後の消息かあつた。生死
あ別か、あ懐塔の作は地くぬ。

一 回向院の相撲の景氣も今度復法の趣があつたか

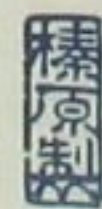
拾七の時考放院に淵田院中心、其の儀長が近衛才
 二世公である。才二世公は、大の南無故味の人。○吳族
 院儀長は、一時日向院に才老親を生かすのいあ
 漫うけ持心と云ふんが、才老の全才をと思ひ
 出す。相撲のシラスをよそ、才二世公も、用内院
 の日勝政を^{務思}生かす。聴かせん、いふ。其
 以、才老の、吳族相撲の、素の、あつた。○院分
 ぶ、柳橋を、平心、迎へて、飲ん、む、あつた。南
 無の、無邪氣、と、酒、敵、して、最も、愉快、の、いふ、あ
 づか。

一、吾等の、東京、英、折、を、校、時代、の、九、物、と、いふ、生、も
 多く、き、し、る、た、の、色、が、流行、した。美、の、年、の、九、物



男兒、遠、い、回、の、と、ん、て、自、分、の、室、入、遊、難、し、少、年
 七、あ、つ、た。自、分、も、ち、年、の、あ、つ、た、が、其、の、級、が、高、かつ、た、の
 び、破、格、の、大、年、宣、日、墨、の、た、逃、避、の、才、年、を、保
 護、す、る、の、も、う、さ、う、う、愉、快、さ、う、い、ふ、た、い、の、あ、つ、た、の
 つ、か、う、一、種、の、侯、氣、が、あ、つ、た。保護、の、関、係、か、ら、其、の
 才、力、も、接、け、る、や、う、な、関、係、も、自、然、起、り、せ、り、と、い
 う。義、兄、中、の、味、七、合、得、した、が、自、分、の、肉、肉、係、を
 後、の、年、の、い、う、う、つ、た。自、分、の、意、を、逃、避、した、と、い
 う。其、時、司、法、官、と、い、ふ、名、の、あ、つ、た、が、市、木、重、隆、の、子
 だ、其、平、と、い、ふ、も、あ、つ、た、が、い、ん、が、依、賀、出、身、の
 才、力、も、十、数、年、後、大、隈、侯、の、困、窮、を、救、つ、た、と、い
 う。番、後、初、め、を、出、合、つ、た。先、方、も、特、に、自、分、を、接

ツルク驚ろいた。靴中の氣の程が異るるらく、
善通の三倍も大きく肥へてゐる。初めを思は
ときいふつと一也。まんが肌と附着した襦袢は氣
中とまゝつと、いくら取つても一晩寝るとこの
夏もまゝくテヤンと式十とまゝく附着してあ
る。自分が去野監獄に在監の時、獄司から特別
待遇を受け、日中、小使部屋に置かれ、それに
大きき火爐があつたのが、押共室に入ると先の肌
襦袢を脱して、襦袢の上は美を露すまはうと
と驚ろを思つて火中になつたのを思ふ。捕風の
方面よりとまゝ入れば、此が、毎朝美を獲りて
此ことを想ひ出す。



一 自分が先いでちの日記者生涯と一に思つた時を思ひ
出す。あの頃の友人は、命のしるしに村長貞のあつた
自分が一息を吐くまで、小坂野三郎、枝元
長辰ら、當時の宿の女もあつたが、早くは、
此の頃の後、東京の山村を輔けて、寺田通行社を種
々としたが、寺田時代の中、その教頭があつた。度々出
身の、自分が三三、三三、三三、三三、三三、三三、
これ人があつた。此人が三三、三三、三三、三三、三三、
一とあつた。自分が三三、三三、三三、三三、三三、三三、
此人と寝食を共にして、最も親密な関係があ
つたが、其の東京に出てから、互ひに多岐があつた。此
男のうらまへ、相合して、藤雨と稱つたこともあつた。

が互ひを惹かりし時代は其の道流の互ひくが尤も
よく切つてあるが、終つて見ることを流に上す
ことわざも永久に別れ此の遺域に培くまふ。枝元長
底の唐兒島人が母を産出身子のつた。新行の
新書の記者であつたのが、日記も不況のあつた心
だんてゆゑの全次高田をさき自合を新書社に訪
て来たりが、自合の北人を訪る初巻、其時の雪中に
あつた。初対面であつたが、雪中に東京に帰へると
すへて其の暮れ思ひ、自合の暮として高田に引
留めて可宿し、毎日の編輯を千傳へせ、時より自合
代つて社説を書いたこともある。文筆を長に
あつたつたが人物の五派をさきあつた。自合は枝元

藤原利

のあつた任かとも、ツツシの文の原書を毎日の後
やつた。同じ書を出身の不図に交つたが、不図に
後進で英也を後あつた。及ぶるうら。枝元と
三日月後の書田、おれと記憶するが、其の自合の
冬合が一戦の社説を出金こそするつた。若い枝元が
女をさき七年抱か出来、若くさく或る娘を産む
ち時におれすまふこともあつたが、若く自合の許す
得たおれ、いふ言を其の男があつた。北人があつた
つて後進の書と、おれと其の社説者きとるつて
一時社合もさうけたことかあつた。枝元の武骨の
人間に似する。但し社説とあつたことかあつた。さ
まのつた、自合の書田時代の書と、比較して、其の

2 驚ろつた日すもあつたが、行き違つて東あひ一回心
 通りの内にあるの早く鬼籍へ入つた。さへから数年
 の後いふも、ちやう行つた時、方向誤りたつたこと
 酒友が、私の魂宿と来り、君と通つて昔々いれぬが
 あつた。あつた。酒友とあつた。酒友と登つて、さへ入つて
 来れば、さへか枝元の意をいひ、母自今とあつた
 と、さへいふと泣き出つた。自今とあつた。あつた
 ことをいふ出す、此後、花とさへあつた。あつた
 氷人、自今とあつた。泣いて挨拶し、あつた。あつた
 一病中、奥向と禁、あつた。あつた。あつた。あつた
 必烟、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた
 小説が載つてゐる、既向、面をさへあつた。あつた

藤原

月峰より (29)

幾人?

空氣を質におく

カイザアの名作「平行」第一

幕第一場は、灰色の殺風景な質屋の場である。

年寄りの女が新聞紙に包んだ細長いものを持つて質屋に這入つて来る。包の中にはパイプがある。

女 こちらは質屋さんで? 初めて参りましたもので。質はその—まだ通つたことがないもんですから。よつほどのことでもなければ、誰もこち

らへなんぞ伺はなくとも済むんですけれど。差し迫つて入

い?

用なものですか。うちの人が病氣になりましたね—か

そりやもう金だの銀だので出来た金目のものぢやござい

りつけのお醫者が、何よりも

ません—ですけど、いろいろと嬉しい思ひ出のある品物

煙草を廢めなくちやいけない

です。この一九二五とい

つて申すんですよ。煙草をや

めずには、銀婚式を擧げる年

めずに咳ばかりしてたんぢや

で—それを書き入れされた

よくなりつこありませんから

時に、一緒に總を取りかへた

ね。腫物が出来て、粘液が出

んです。多分そのパイプの

らなくちやいけないんださう

蓋は、銀でしたが—

です。

質屋(パイプを女に戻して)こん

です。うちの人の大好

なものぢや貸せません。

きなパイプを隠しちまひまし

女 (ちよつと吃驚する—すぐ

てね。よくなるまで、それを

包みながら)パイプぢやいけま

質入れしたらいゝだらうと思

せんか。まあ知らなかつたも

ひまして—小さなものです

のですから。さうも思つたん

が、ちよつと見て下さらな

ですけど。そりやもう、わた

しにしたつて覺悟はしてをり

ました。でも、人間てものは

生きてる限り、ひよつとした

らと思ふもんですからね。え

さうですとも、生きてる限り

はね—お邪魔をして済みま

せんでした。悪氣ぢやなかつ

たんですから、どうぞ悪しか

らず—(入口の方へ二足三足

歩きかけて、まごつく) 出口は

どちらでしたつけ。分りました

た—(去る)

少頃して、今の年寄りの女が

また這入つて来る。

女 (ふるへながら) 願ひで

す、旦那。さつきは、こちら

へごとを言つたんです。あ

たし達はもうせつば詰まつて

るんです。何處の質屋へ行つ

たし達はもうせつば詰まつて

るんです。何處の質屋へ行つ

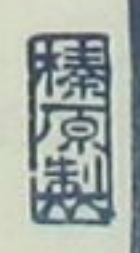
たし達はもうせつば詰まつて

でも顔を知られてますからね。あとからあとから入質しちゃつて——もう家の中はからっぽになつちました。

この二三年みたやうに災難にあつたことは、この齡になるまで、ついぞありません。戦争の四年間、ひもじい思ひをした揚句の果が、夫婦揃つての病氣續き。税金を納めるのが死ぬ思ひです。まつたく、さうでもしなくちゃ、お政府はやつて行けませんからね。質屋 品物は？
女 このパイプを取つて下さいな。このパイプは、そりやもう何處まで、いたんぢやありませんけど——でも、自分の吸つてる空気を質におけもしな

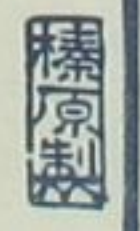
いちやありませんか。
結局、女は、一萬マルクせしめて歸つてゆく。

入んの取向の脚色
びおやしくくさる、日本せい
愛の言葉を使いさうなれを
出さるの内いさの字を使いさうなれを
い其の一例が、相手を愛し入ん、林あつ
を辛抱する、社会存徳があらぬ
居の喜んひ笑物、えの若た。と七七禁
相に極くわんさうの、飲屋の借債を
受けずれえ出すお弟さん、
ニナ取らうと一層あつた



一 自分がちやうど、初難から関係すること、社長
名義で近へん時、ちやうど事件のちやうど物語時代が、
自分の血氣の荒ぶる、あつた。同じ、戦後、此に、
あつた。二、三、とき、あつた。が、面談、ちやうど、自分の為
め、開か、た。ア、夕、べ、何人、も、先、比、つ、て、自分、と、親
しい、関係、を、生、じ、た。あ、二、世、性、が、是、が、父、の、公、海、の、あ、つ
た、家の、娘、の、あ、つ、た。面、談、の、ち、や、う、ど、席、上、土、地、の、有、志、が
所、中、口、論、を、始、め、た。の、を、自分、が、仲、裁、を、め、つ、て、あ、つ、た。
此、の、世、性、が、自分、を、踏、ち、た。遺、守、と、奉、養、を、ま、つ、て、く、ん
た。あ、ん、が、後、の、始、ま、つ、た。同、も、う、く、程、の、う、口、マ、ン、ス、が、起
つ、た。此、の、世、性、の、同、し、新、多、社、の、社、主、と、関、係、あ、つ、た。の、が
冷、却、し、比、時、で、あ、つ、た。何、れ、も、其、の、義、見、こ、う、な、ら、う、な、ら、う、

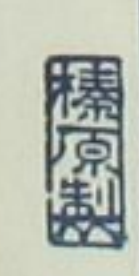
前の関係者より遠慮を乞ふに妨げられた。或る時
台所の行き流りの二階に寝掛けた際、客中、いかに
つとま人が見張つてゐるのを寝具を二階に運ぶと
か出来ぬといふので婢が私の寒さを心配してソファ
上つて来て、衣類を全部脱いで私しの寝具代り
ゑんを着せし、主人の目を掩ふたことゝしてある
と、ある時ぬくぬくの日の中、此家へ到つて飲んだ
関係者が、三味線を推して席を臨んで、どう
いふかとつづくと、いろいろ内がやうまうと云ふから、養
老の鑑札を下さつた。養老者であるが、彼もこのこ
ろ、さういふところであつた。此家を譲つた多分、このころ
とゐるのを棒に振つて、市前より自分も何もいへず



に此仕事がある。其時のビツクリし。一旦冷印に
前の関係者も他人と関係の生じて、又、嫉妬も生ずる
らしく、自分から、下流の以る先、復讐した
の、自分から、嫉妬も生ずる。この五十年
前、横濱の、一列後進つたことゝする。二十年は
かゝる、ある人が、自分から、相手を、彼れ、其れ、と
ふ、かゝる、物と、船の、款を、出、い、れ、こ、と、を、想、ひ、出
す。

一私の三十歳の頃、娘義太夫が都下で客席を賑は
し、この頃、ある。其の頃、喫茶店の、ヤエートレス、と
いふ、あ、あ、が、ら、ん、の、末、末、エロテックの、句、い、を
かゝる、書、生、筆、に、此、の、毎、日、の、夫、艦、に、後

助を激賞しにふれ、下を其の改めあつたが、
塩原の湯あり、川橋に下つたと思ふが、母を運んで
後、此が谷家とあり、自分が出ッ、喰ひ、自分
ハ、ハの材料を得たと云ふ、又、又、其後書生集
の會と路あり、相変ると、後、此を唱する、自
己、彼等と比して、ある、君等、高し、彼れを、
す、す、(まきまき)が、俺、裸体、の、後、此、
あり、もの、ある、の、向、肉、の、量、か、
か、い、か、と、一、喝、す、と、改、等、の、
か、文、等、協、合、の、で、松、井、修、康、を、
き、り、に、此、の、女、の、後、味、を、
●此、私、の、現、る、夫、の、お、き、位、地、
の、お、き、位、地、の、お、き、位、地、



●此、此、一、花、か、よ、い、と、あ、ん、た、ニ、キ、
持、て、も、や、ま、の、後、こ、か、難、
浮、女、の、か、い、身、生、ま、の、
占、め、に、此、初、を、
多、手、の、出、
づ、い、の、
●此、中、の、
池、田、
く、と、某、寺、
の、抱、一、
時、

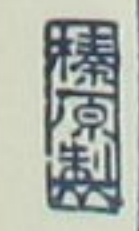
「此と云ふ所の、吾師里から出れば画家として相
の才がある、いつか此人の為めに追々遠の今を伴して
どうかと云ふ所、實に多分の計画があるといふ
とまづか、自分も切に勧めぬ。實にぬる縁因
此村の遺品と相違、自分の家々も存してある。皆
京に求めれば、印が全部五六十顆もある、
を収めれば、印は角の遺品一形の珠をかける
ん七あり、外に南都の古刹の杖を以て心つれ、
加あり、桐箱の短冊、形の蓋、此村自叙の句
があり、畫の内々と、画障の山水の大幅がある、
南畫を試みれば、本人得意であつたと見へ
自かより表せば、一家のありと云ふこと、
静寂

遠今と伴うとある、自分も老人の此等(畫)品を生
出さすといふ。

一 高申 壺装、木瓜の花、或三味、を後にして、又人岩
又意三の、すがたの如くあり、あるの、其の森、
る痛快味を伴ふ。

親友の洞折れ、おまひ、すも遠、
が、いの、りつ、も上、ある、
わやうと、おまひ、と、
と、
飲、
或、
早、

つて来とえと、例のふく、意三先生、都下の三名
と連んと末と盛ん、飲んびあむむの女、盃
盤改と狼麩、やあし、はくこまあま、
と、どうも、主人の、客の、評が、あつた、さ
と御意の、まゝ、なつて、二座と、元廻り、の、うと、一、番の
去席、に、年の、次、十二、三、四、の、少年、が、あつた、
や、けり、一、番、人、前、に、お、腰、を、張、鞆、し、恥、か、さ、
に、下、向、と、な、ら、う、し、あ、る、可、愛、さ、い、い、小、僧、じ、
あ、ん、の、誰、だ、い、掛、換、さ、え、の、掛、換、一、ウ、ン、掛、換、が
や、今、朝、皆、を、連、ん、て、久、方、振、り、の、淡、さ、る、え、物、
釣、堀、で、魚、を、あ、つ、て、み、ま、と、こ、い、つ、の、俺、の、ホ、テ
ツ、と、但、つ、の、さ、川、つ、か、ん、が、魚、を、釣、つ、て、あ、る、



剛侍り、岳、んと、命、い、お、修、と、と、三、匹、釣、り、上、げ、し、
か、あ、ご、ん、か、う、本、御、の、あ、る、の、高、く、性、く、の、れ、か、う、
こ、の、心、を、持、つ、て、来、い、と、い、つ、れ、や、う、な、評、じ、掛、引、と、
連、ん、て、来、い、れ、た、い、と、す、す、り、も、不、揃、れ、か、う、奥、さ、ん
い、お、腰、を、出、し、て、背、つ、れ、の、こ、だ、い、い、と、天、狗、烟、を、
を、ふ、か、う、く、さ、ん、か、う、お、り、二、時、間、も、こ、の、あ、
年、を、あ、ら、う、つ、て、あ、ら、う、目、札、を、お、取、出、し、て、少年
に、く、ま、を、や、り、こ、さ、あ、お、前、の、物、ん、ご、ん、か、う、も、上
手、さ、や、ん、よ、し、と、い、や、う、と、い、れ、よ、の、あ、す、い、
こ、の、掛、換、少年、こ、を、あ、鏡、花、が、帰、来、回、の、早、飯
主、税、と、い、い、人、お、れ、と、い、ま、あ、
一、以上、を、あ、き、う、つ、て、想、い、出、す、自、分、の、送、流、い、ま、回

江戸創刊時分 自分、新多の事、細い涙を流
高田監獄、お堅さん、向き、おのの本監、
漢送、てん時、金と竹村(良友)の、おん一人年
若の常事、犯(常監)に、あつた、おんハウキリ記
隠か、(い)が漢送、中、おん、
休憩、
見、
出す、
自分の車、の前面、を、
分の車中、
か、
お、
お、

漢高

差を、
漢送、
つ、
得、
に、
ら、
た、
余、
異、
昔、
何、
飲、

命じ宿不相應の盛宮を偲し、日行の罪囚より
唐を越て鐵を供し酒を飲ませた。警吏より
日唐とすくめれば流石(遠)雲も海宮に見
張つたおれ。酒公を張つたかまんも受けりて
自合の解か開つて(傍)席中の囚人のあることを忘
歌の陽氣ある、~~刺~~坐中の常犯人を相する
録の説教を説みれば、飲ませる説くれば、~~来~~
窓合(程)の女より笑もさく、~~来~~
殺るに波んの心得をいれ責めを、怒るに出獄
改悔せらるまつ(事)を説いて、~~来~~計るお世
治とるあ心きだが、~~来~~お世の酒のあつたの
公(清宮)の警吏の礼を云いんこと~~来~~
つかとも真面目

此の段は、逸話と似通つてあるが、~~来~~連想の
清宮。同法長(監獄)あり此際一人の伶削の
給仕がこれ。十二三はけり、~~来~~姓の忘れたが、~~来~~
左にあつた、~~来~~某(清宮)の子に
父も、自合のわかれ、~~来~~只子を養ふていふわけ
と云ふたので、~~来~~其の清宮(路)も不回答を云ひ
つたが、~~来~~後(事)あり、~~来~~後(事)あり、~~来~~
いさく、入獄の記念に、~~来~~教育して見たいと思つた
から、あつた。後(事)あり、~~来~~あつた、~~来~~あつた、~~来~~
からの去身のあつたことを、~~来~~想ふと、~~来~~此少年七人の
運命を述べた(事)あり、~~来~~

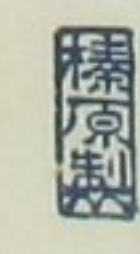
(記)臨み

一 自分が神田の家を全うし、以後村上の養生を一人
 主として置いたことあり、日々中身も通いせしが、世間
 へいし出来たが、此男の素性の所謂、持程部を
 属するもの、子に善悪の家庭を、口徳を忌
 む習慣がある、まゝ、まゝと切りつゝ、家庭を、まゝの
 飲食と共に、海蔵の妻も家族も之にと
 畑、おこし無つた。命をやり、命を傷や、字や、書か
 ず、板を八人とする、臨み、其志を自分から、世
 と政治家を、うしろと云ふ、自分、百方其の
 可うくと、後、農神、ひもやれと、勧め、わが、人、と
 を承知し、うしろ、女、の、志、に、任、す、と、口、時、に、予
 の世法を、終つたが、其後、不幸、一二年、と、世

死、亡、し、と、言、へ、ん、が、彼、ん、が、如、き、其、の、性、の、し、の、が、あ、る、か
 の、高、地、を、抱、か、し、身、を、容、せ、れ、自、分、が、其、の、政、治
 の、熱、中、と、め、れ、世、に、い、は、し、ま、す。斯、の、心、理、は、世、間
 の、指、導、に、反、撥、し、起、る、よ、う、に、敢、て、怪、し、ま、す
 是、れ、も、い、が、世、間、に、在、つ、て、其、の、世、法、の、あ
 り、ま、す。其、の、政、治、家、と、し、て、其、の、世、の、中、心、の、身
 を、折、つ、て、う、ろ、う、た。自、分、の、口、徳、を、世、に、い、は、し、ま、す、
 此、故、に、あ、つ、た。

一 高橋大次郎時代の、その身、その文、その口、徳、を、福井
 彦次郎と、い、は、し、ま、す。沈黙、家、に、あ、つ、た、が、其、の、
 皮、肉、を、い、は、し、ま、す。其、の、世、間、も、あ、つ、た、が、
 未、だ、が、格、が、危、険、と、い、は、し、ま、す。其、の、世、法、の、あ

業めるが二時間もぬくと北人のこへ行くのかお生
しと決まの課業めるといつてくる、あといち
んたのじか、女のぬきの時を、車を馳せし芳原
へ出うけ、酒も飲もうさつくと一件と痛
ましく切つてくるとそへ、他人の追追を許さな
まの登橋法を実行した、舟かた質屋へ行
くのを任務としておたのめ、いつせ出さけ
前より同室のち、中し、表方七何う入るる
用を足してやると言ふか、平んくせ女房に
托したことも或田があつた、北人の何もお合つて
か、つて起然としておさやうも面白う人物であつ
た。白く重なる三書(雪炭)のや、うま愛り物と在り



が福井ハ依又くれば、後り物であつた、私ハ一別以
来廿年、七経を、福井ハ神大、の某の夜の枝
長ひあつた時、一むら、其家、の標記を忘
んたが、其以出ぬ、北地、を後人が見ること
由、も満ちた、諸美百健、紋の得、意の
語ハ、或る、更、こ、世、相、を、痛、罵、する、鋭、着
鈴、なり、難、い、よ、か、あ、は、紋、の、面、目、の、躍、め、と
つる、は。

一 東郷元師の北一殺の三字、真に真に才織人を救す、
力があつ、国家安危の秋は、かろい、い、ろ、く、の、跡、を
二用いて、めを、さ、す、元、師、の、教、録、の、日、伊、藤、と、上
陸、一、殺、の、跡、の、任、か、し、其、帯、に、北、一、殺、と、押、書

しやの以、能と生命とを有る故の帯、此一説、大表
木を以て、神の福、福家生春と云い、此一説、
光く、若い文、若者連が花柳界を横行し、此以人
ハオ郎連と云く、夫の子自身、オ郎を以て、任じ、此以某
娘、いうる、さく口、説か、う、の、忘ん、狐狼連と呼ん
だ、七、痛状、ある、此以、考証家と云ふ、真面
目、研究家の範圍に、後家採し、と云ふ、道
徳、ある、若さま、考証家の、扱、かす、文献、い、多
く、名家の、未亡人の、手、ある、か、手、を、こ、へ、伸
ぶ、こと、が、自然、の、事、ある、か、何、と、ま、ま、さ、へ、か、て、い、福
地、極、極、の、予、の、お、人、と、ま、ま、此、以、此、男、才、物、の、或、る、時、自
分、の、グ、テ、ー、會、を、似、似、し、た、か、入、ら、せ、ま、と、新、派、可

標

この、で、自分、の、愚、才、分、の、こと、か、と、思、ひ、て、自分、の、生、憎
愚、才、と、ま、ま、と、福、地、の、云、ふ、い、い、事、と、思、ふ、こと、云
ふ、が、二、あ、か、ら、い、良、人、を、愚、才、(主)と、云、ふ、は、此、分、の
起、る、所、以、に、ま、ま、の、い、う、で、自分、七、一、元、と、い、た、野、本、向、い
と、ま、ま、男、の、書、藝、執、心、を、重、て、大、の、飲、徒、が、あ、る、女
友、人、が、あ、る、人、に、似、た、し、た、の、を、女、の、人、ハ、ま、ま、(連)の、
と、ま、ま、顔、と、い、は、し、る、理、ノ、ム、ト、ハ、リ、と、聴、へ、
か、と、無、理、七、ま、ま、の、い、は、る、事、。

一、
この、で、自分、の、在、社、時、代、若、者、と、い、て、王、地、の、人、の、古、橋
包、正、と、ま、ま、の、あ、つ、た、ア、ワ、ベル、時、代、の、司、法、省、の
以、り、校、の、佛、法、を、宗、人、の、男、の、漢、字、の、宗、義、の、も
あ、つ、た、何、れ、か、の、ア、ワ、ベル、と、い、た、の、を、自分、の、編輯

向く毎日も多量の汗をかいた。専ら友人に就
てもいふ事がある。或る時故月香田を去つて
は息が無くうつらふことがある。ヤツト現はして
たのどろしむるといふことも故月の無銭旅行の
九折に十折をいふと云ふことひあつた。自分も
のりこ具を多くして置酒して毎日を祝し
一夜床を並べての寐をうとう其の旅行中の海
を聴き天の事いふ事連した。仇客や友人が
無銭旅行をやつた事教へ珍らしいことひ
うかがひを便うとするのひらき。漢文未だ
の字を放りするに容易なるひらき。無銭
旅行も懐かき事と云ふにう、まに、宿はな



ゆめの助旅を得たこといふ事もあるが、敢て
ど人らの境界もなきが、よくもやり遂げたと
感じた。本人の流しは世間の流しからかじめ
頼る人も人を頼りて出うけられ、深きひらきの窮
すゝも常々忘れている。無銭旅行と思ひ
出すのひらきを訪問して助かつたことが一再
さうかあつた。某地に入るに時、頼るべき家が
なく利頭△の家を訪ふに、恰も△の志士が
重病を回復して旅路中且△も不在で其の妹
が応接したが、旅子を見ると食費の△数で
へるのひらきを頼ることも出来ず、野宿を
由義さうせんれと涙つた。此の△といふは自

分が長也堂住、在堂中、状跡家、林、銅
二変せしん某判書、の言、自分か長也堂
堂中、雨、湯、さ、る、れ、が、其、の、押、巻、を、名
つとめ、る、ま、流、き、ま、る、利、産、自、分、の、及、ぶ、所
ひ、ま、る、つ、れ、死、ま、る、友、交、の、清、職、今、ま、る、も
い、ま、る、忘、ま、ん、七、此、人、こ、者、を、祈、ら、ま、る、ま、る、自
今、の、方、が、要、る、し、れ、の、心、自、分、の、心、筋、に、恥、ぢ、れ、や
う、ま、仕、末、自、分、が、出、獄、し、七、市、中、く、ま、る、と、此
へ、七、刑、期、満、ち、申、上、の、途、次、ち、向、を、こ、ま、き、自
分、の、利、を、道、に、し、れ、の、一、夕、安、を、設、け、て、款
後、に、其、時、古、橋、の、家、に、加、つ、れ、の、か、其、縁
起、に、無、縁、放、り、七、此、人、の、家、を、尋、ね、ら、れ、の、心、も

つれ、此、人、の、名、は、全、州、に、馳、名、の、長、也、堂、の、名、は、春、秋、野、の、田
ち、美、男、子、と、あ、つ、た、斯、の、一、夕、の、切、り、合、殊、と、れ、は、の
コ、ン、ナ、人、す、む、七、款、を、祈、ら、ま、る、か、つ、れ、こ、と、を、思、ふ、と
七、橋、の、族、の、難、七、想、係、に、係、り、ま、る、七、橋、の、此、人
の、家、を、祈、ら、ま、る、換、り、ま、出、し、七、女、の、容、も、心、を、勤
か、し、れ、と、云、ふ、れ、が、あ、の、美、男、子、の、妹、と、い、ふ、美、人、と、あ
ら、う、と、思、ふ、七、首、肯、い、れ、人、間、に、あ、る、ま、る、花、急、の
場、合、の、も、本、館、の、助、兵、衛、根、性、が、起、つ、と、ま、る、い、ま
ま、い、あ、る、七、橋、が、九、物、の、集、河、を、流、す、時、渡、船、の
料、金、が、無、つ、れ、哀、を、祈、ら、ま、る、七、福、人、だ、り、心、が
同、船、に、着、い、美、男、子、が、棄、り、合、り、し、七、此、の、心、を、思、ふ、
對、す、る、思、ふ、に、無、銭、の、白、状、が、出、来、り、し、七、憐、れ、

し所持るとうく、凡名を一枚しからうれりも
美と流結物、^二流結物と云ふ白状も又人々
ふん、悦、もフ、ラ、ク、リ、ン、が、窮、時、他、る、自、分、の、身
と云ふ家と物を与ふる、右、格、と、母、同、し、心、が、動、い
ル、流、と、同、一、般、に、自、分、の、徹、宥、物、母、の、甚、心、決、を
聴く内、又、最、も、お、し、ろ、く、感、し、ル、の、此、の、後、船
決、心、あ、つ、た。

・ 自分が苦原の花柳に流連し、この方ゆく赴
頃、あつた。自分、久しいこと花柳に是と云ふ
入人多い心條を持してゐるのむ、^三道、道、と、夜
半、お、府、身、々、の、敷、業、に、流、結、り、志、所、行
き、と、遊、け、に、し、て、う、ち、る。其、の、際、庭、が、ま、く



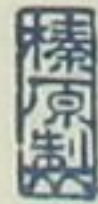
此の流、く、又、動、じ、あ、ら、う。何、ん、の、動、機、か、ら、苦
る、出、し、け、れ、か、今、の、記、憶、も、ま、い、か、あ、る、死、状、が
苦、原、に、流、結、し、も、あ、る、の、と、救、ひ、出、す、は、な、い、出
し、け、て、自、分、が、ミ、イ、ラ、ス、ま、う、れ、や、う、な、こ、し、も
あ、つ、た、鬼、と、角、一、時、の、成、聖、人、を、流、連、し、た、ま、い、を、
の、悉、智、を、除、く、ん、考、の、ち、ゆ、く、赴、く、氣、な、ら、う、つ
れ、い、ま、あ、つ、た、ま、い、あ、つ、た、還、か、お、ん、ら、ん、こ、し、ハ、
苦、原、の、漁、老、の、坊、か、あ、る、が、世、色、を、四、脱、し、こ、し
が、真、味、の、い、ま、う、れ、也。其、の、一、部、は、刻、に、一、天、地、を
ま、く、敵、樂、未、郷、に、あ、る、こ、し、入、目、を、送、つ、こ、し、を
此、上、の、ま、い、悔、快、が、あ、つ、た。漁、老、を、推、一、の、目、的、と、す
こ、し、の、ん、敵、娼、と、化、臥、す、る、の、お、け、の、ま、く、と

秀いふらぐ行ふよふか多敷むあまけんども、
 性慾を満すま楽の一端(こきういのか、娼妓を
 離れよあ天地は酒や花を者や都御(いね)
 おうか、自分かやふる酒を才一の風味とするよあ、
 ハ別して重楽の多くのかーセントを占めておれ、
 の此のそ等のおひ方ハ即かひあつた。悪らうひを
 すふのやうに行動を離れ、秘蔵を主とする
 こときことを新して排斥して、堂々と男子的の
 やつた。市中へ狭いから娼妓をも茶屋をも料亭をも
 にも貸屋をも、いふ所い今も無のやうにまゐる。
 或る時、大雨をひき、飲みぬか、あつた。あつた時
 娼妓のへうこ、ハ定を此、ハ花魁のなや

を見物(い)と(い)まの検徴(い)行(い)娼妓の(い)若
 一の道中(い)式(い)働(い)つ(い)よ(い)か(い)あ(い)つ(い)土(い)堤(い)の(い)す(い)枝(い)や(い)田
 圃(い)の(い)牛(い)肉(い)を(い)酒(い)を(い)飲(い)ん(い)び(い)碎(い)り(い)花(い)術(い)く(い)度
 つて来(い)れ(い)こ(い)とも(い)あ(い)う、(い)飲(い)つ(い)ま(い)あ(い)の(い)流(い)連(い)す(い)る(い)の(い)か
 内(い)心(い)疾(い)く(い)ら(い)う、(い)大(い)門(い)を(い)入(い)り(い)重(い)め(い)つ(い)た(い)の(い)果(い)花
 名(い)陣(い)取(い)り(い)を(い)茶(い)屋(い)の(い)婢(い)の(い)あ(い)え(い)を(い)侍(い)儀(い)ひ
ハ、^{ハ、}娼妓の(い)あ(い)ま(い)の(い)こ(い)とも(い)あ(い)る(い)か、(い)皆(い)を(い)娼(い)妓(い)の(い)執(い)着(い)
 する(い)の(い)ひ(い)さ(い)く、(い)堂(い)々(い)死(い)の(い)款(い)楽(い)境(い)を(い)つ(い)く(い)す(い)る
 こ(い)とも(い)興(い)味(い)か(い)あ(い)つ(い)た(い)の(い)ひ(い)あ(い)る(い)。ハ、(い)時(い)代(い)の(い)お(い)ひ(い)友(い)を(い)
 ハ、(い)四(い)五(い)人(い)あ(い)つ(い)た(い)か、(い)あ(い)ら(い)う(い)が、(い)依(い)賀(い)の(い)人(い)の(い)法(い)社(い)の(い)臨
 谷(い)道(い)西(い)横(い)後(い)打(い)林(い)の(い)人(い)の(い)法(い)社(い)の(い)若(い)の(い)海(い)死
 する(い)ひ(い)あ(い)つ(い)た。海(い)谷(い)の(い)山(い)寺(い) 終(い)不(い)七(い)集(い)後(い)と

終に終如し、森の池に利するらんは、自今、彼人が京
都の控訴院判事である比久云振る、谷河に比の、
心あり比。

・ 自今が芳原に、おん比次、端梅と等級があつて
五大橋を本藤と唱ひ、昔しからの格式を保ち
、主人を定むるも、登梅と七橋、ふら、而時柳橋
と、ふ年忌、美男の、後海家、八、ゆん、登梅
、比、か、つて、括、院、に、湖、着、を、生、し、た、こ、と、ち、あ
、比、本、藤、三、屋、原、か、名、を、使、う、こ、も、と、白、丁、(酒
、徳、利)を、授、け、う、こ、も、を、許、さ、う、ろ、う、比、芳、原、く、入、う
、比、し、り、四、方、何、ん、か、も、も、運、入、う、み、比、の、を、後、の、巻
、比、土、堤、こ、直、い、入、口、ま、ま、の、み、を、い、ら、き、こ、い、



城の門を、改、け、比、ま、の、福、池、橋、原、か、古、い、比、聯、を、鑄
、ぬ、い、比、門、が、あ、つ、比、大、三、の、日、宮、連、か、白、晝、儀、装、行、列
、と、や、の、比、も、比、頃、か、香、吹、駒、さ、り、ま、も、か、コ、ン、十、馬、康
、駿、さ、と、や、の、比、が、自、今、等、の、ま、ん、の、全、比、冬、如、せ、り、
、酒、飲、ん、比、も、斯、う、馬、康、駿、の、頓、の、垣、ひ、が、あ、つ、比、
、却、河、を、相、手、ま、り、比、こ、も、あ、つ、比、後、の、ま、り、却、河、の
、垣、ひ、心、も、也、無、氣、を、い、あ、り、席、心、と、う、い、比、の、か、吾、其、寺
、又、氣、三、又、か、よ、か、つ、比、比、界、無、花、を、平、等、の、漢、渡
、の、真、似、を、す、る、位、か、洞、の、山、の、あ、つ、比、茶、の、木、と、ま、の
、長、酒、尾、入、連、ん、と、世、つ、比、も、比、の、却、河、の、お、蔭、ひ、
、毛、布、摺、帯、七、席、を、使、う、一、品、五、座、と、い、ふ、自、今、物
、で、最、上、の、酒、を、す、り、七、飲、み、各、日、梅、の、花、魁、が、比

一品五厘の念物も新造を以て買ひ又未だの念物
等の真さを一へ思ひ、えを目前に見ることが好下物に
あつた。

一 妻がした泥のすま^{（誤）}統の華がさく、自分が妻を
定めたの北吹ひあつた、事の決して祝杯を呑むの
たの北の^{（誤）}花街にあつた。自分の初志は常つて
愛したこともさく、迷ふにこともさく、えを極力
賛成したとも二人の親友にあつた、ふいと山内
^{（喜川）}との氣配、賛成するよあつた、或
し時妻とさく、さく、えあつた、さく、えあつた、
これのを核とする、酒、哥、意を墨堤の某酒
楳にほめた時、二人の親友を回付の、彼等から

結婚の口を切つた。哥意、最初妻のの叔子
び、三人の選擇が問あつた、相高、華族か
ふも、世にさく、さく、えあつた、さく、えあつた、
入ると結局、哥意、快く、誤った。這般の決念、
高言、妻は、自分が口舌を答ふ、さく、えあつた、
北の決定をえ、さく、えあつた、さく、えあつた、
人、さく、えあつた、北の二友が北、お、意、えあつた、
北の、さく、えあつた、さく、えあつた、さく、えあつた、
自分と答ふ、さく、えあつた、さく、えあつた、
お、擬、さく、えあつた、さく、えあつた、さく、えあつた、
二人の、親友の、さく、えあつた、さく、えあつた、
さく、えあつた、北の決定、さく、えあつた、
さく、えあつた、北の決定、さく、えあつた、

法婚・法に親しむと云ふも四套を破つて斯く新くし
方式に據つた^{あり}。

一 十数年を経て郷友の陸君を心きしが此地
を踏み入る時めまことかあつた。私の敵場
の私を知るもかくもきつた私の故郷をせき私
の姓をよすけけし私のよいうけんをあいらつ
たあつた。統るも俄入かき名刺を投り出さん
とすうのひ、自合の手早やれ名刺を寸断して
壁中へあうり出^た。敵場いよんと拾ひ
集めて、静かにつき合はせるとしてめれが漸や
く心ありかあつた。辛れと私り新るは
住持の住信をまのてテウキリ言ひあつた。自

今七愕然とれが前後此の前身と思ひあつた
れ。女に遊べん韓潮の産南園を歩くと上望
三法いよまむま入るあつた。とき敬礼を以つて
自合を思つた。腹をさへて見ると此めいせし
の某娘が、従才かこんと沈溺しやのあひいそ
煩いせんれ成人の果てあつた。自合も果然
とつたことかあつた。

一 廿三年湖心湖創法をん初なる是奉の行い
の時さる自合の仰をいふつてはるを推しん
とん。君堂●誓の橋法をのめとめをあてて
送るもそのまあつた。自合自もあつた
てあつた。おとせの準備して無ん



越後の武家伝を著すのを見ても其の
 が、此方の面白入る事あり一六七存在する
 此が、信長を押し下げる人、其の息子が
 わのそのわが、私の才二世を長男が、
 まのその好きむ、中、をい、毎日出さけ
 此、才二世の私、一六の款、
 受け、才二世の才、上つて、款、
 此、一六の主人と私の、と、
 生、
 病、
 書、
 の、



其後、
 〇、
 の、
 出、
 今、
 の、
 圓、
 の、
 リ、
 又、
 不、

と盛人の亭榭が立ちこちありて、池の内園に、
の榭木が飾りてあり、池畔を散策するも、松林
の、亭榭と、池の、水と、亦一快である。
北風の海が、今、昔、あつた所
とあり、今の池水と海と通して、海の手満ち、
池水が増減する、松海家の、
と、池の、親族、三倍も大きき、ある、
と、久世大和守の、
山崎、
れ、
此、
の、



北風の海が、今、昔、あつた所
とあり、今の池水と海と通して、海の手満ち、
池水が増減する、松海家の、
と、池の、親族、三倍も大きき、ある、
と、久世大和守の、
山崎、
れ、
此、
の、

第三の一部分であるのである。他の二部分の変更は記す
ることである。

○横濱の開港してから十七七年の間に、
七十七年の自今分の年齢で、自今の生れたる年を
明治の五つ比の比と知つた。横濱の日本の文化史上に
極めて大切な關係があることゝなるも、
この時、江戸の村であつたのが、
市長といふ。前知外國商人が、
と云ふ比の、
比やうな趣がある。外國人向きの趣、
るも、
特別の教がある。何んか、

横濱

漢を求め、おの無つた。あやしめる外國の行かん外
人を客とす。船橋十番、外國の酒を、
赤毛、
大穴、
訪あれ、
いお、
リ、三浦、
とか、
があ、
らい、
青、

校用い大の者
利代大にきん
をたつて防閑
したる事

魚海に鯉意より多しと云始甚と評ふはこゝかあるや田原
の十倉録し能く久しく北地との比をえを教へる所ありこ
ともある。酒橋の如橋むも自分の教味を合する所あり
自らの三溪園にけい自分の教味を授け常と大隈彦
とせし治ふれしともある。その以ては自ら評ふれ。あをこれ
けい横濱よりきり教味色がある。

○字引……各存の辞典禮文化と裨補するもの奥の字
引の編纂家も骨折れしものあり。油つれ辞典の出
こゝに今く文化の進歩を表現するものあり得。今も
百年前と謝するが如きをとるが如く其心一に彼等
が如き辞典を修するもの困難をしれぬ。彼等が日
十字位より字を譯を施し、そして是等と改字を便む



……其のれも著と書いれ其の存本も今もいくつぞ残して
あるが其の流いしものあり。古書辞典を編纂する
もの昔一の死以上の仕事であった。支那にあると大部の
女方のいうく、あるが皆え昔の官撰の多数のものあり。協
力にしろ出来はる。日本に個人がけ活字を字典
か出せるが皆一生の力を盡してゐる。編纂家の勿論其の
じまが是を出版するにも又容易かたない。エリサイヤン
デヤの死の亦の書を刊行するも己の相向の定力
が無んば、其の山年官者等の書が大部のものを出るや
うんものなり。日本の進歩に微び此點に於て外國の敢て後
と取らざることを望むものあり。このことである。

自分からいへば昔の時代は字引を引くが面倒が極むか

ついが論家引を偏見あることを自ら告げつて見ようと思
 ふと思つたことがあり、又病先考の晩年より或程のあち
 を偏見ある未刊のものも、稿本が在るに満ちるるも、由
 東便の大日本地名辞典六冊、自合の家で編輯を以て始
 めたものが十三年を費して完成を生じ、今の流布したもの
 の、斯ういふことをも、自合の字引や辞典を執ること
 が煩かしいので、手取りにこれが無い、あかき者生時代に
 のエグースターの大辞典を有しつゝ、あれは實に異物用として
 辭つてのれが、洋書のあつたを、あつたといふ、いふことであ
 り、此れ併く、あつたといふことを、彼等が持てたものといふこと
 であつた。

澤田

賦の敗することを行ひ、丸筆が女の書に異つた。よ計
 畫の可なり成り、此れ利を一生に生ずる入つと、あつた。あつた
 のよ、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 理のよ、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 くる、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 座のよ、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 北、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 漸死のよ、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 志、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 の、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 自合のよ、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 の、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。



祭食日のヌイア—る還に説傳

【札幌電話】 北海道各地に残存する約一萬四千のアイヌのうち六月十九日の日食地帯に含まれる十勝や北見、宗谷各地方に棲む人達の間には日食にまつはる傳説を子孫に傳へ昔の祖先達が盛に行つた儀式を復活しようとして當日各地でアイヌ日食祭を行はうといふ請が起り、既に旭川附近、近文アイヌ部落では此種河上酋長方へ栗山氏達が集まりお祭の豫行をやつた、彼等が人種として持つ特殊な傳統への回顧や望郷……そんなものがこの一生に一度あるかなしの日食を機にヒヨイと頭をもたげたのであらう

私達の先祖、現においさんの代まではこんな神秘的な夢の様なことが生活の一部であつたといふことを子供たちにも語りつがせ度いと思ひまして……

と日食祭の發起人が話してくれた、各地アイヌ間で一せいに行はれたら北海道の日食らしさを描く特異な圖繪として遊覽客の人氣を呼ぶであらう

お 祭豫行の時は、栗山氏をまんなかに家人が居座び、鍋やうのものを持ち水を入れた金籠から蓋で水をきり天に向つて拵ふと共に主人が、低く或は高く大の連吠のやうな、何か哀號に似た聲でウオーツ、ウオーツと叫ぶとメノコ（女）達がこれに従ひて叫び合した、手に持つた調子がカンカンゴゴンと打ち鳴らされた

——江戸時代中期の書（筆者不詳）「渡島筆記」の中に「日月の蝕には戸々皆出て天を仰ぎ呼んでエラキナー・ホーキヤキヌバホーキと言ひケマコルシンドコのバルベ或はオツチキを打散き明に復して喜悅して止む、エは殺聲なり、ラキは死なりホーキは呼聲なりヤキヌバは活なり、これ死し給ふぞ活給へと呼はり助くる意なるよし（原文のまゝ）」とアイヌの日食の行を説明してゐるが、ケマコルシンドコは器でバルベは裏面のことでつまり、太陽が死ぬところだからみんなで大聲で呼んで蘇生せしめようといふわけである【電傳は祭の豫行】

六月
三日
土曜
朝日
所載

たのむをえらふもウエグスタリーの科をいぢつたのぢいぢい
ア—こんかちゆびあきんれとまあ話を男の音からな
まああせよんれ。
日本をささるう〜伝承を言ふ者があるが昔〜から
あつた、日康照宗典の去典の脈引を本書と就
と一々考訂して正誤表を述べた人がある。
今このお書があるが七巻と多く出ている、早稲田の増田
しんやうらふあがある、敢てその書といふとあつた
おしんまのくの大辞典の編纂者の新又南は
こゝろ三浦をのちまあ技術のあつた人がある
こんかちの辞典もあつた、日名も留めたいよんれ。

〇日分が衆議院に激席を有してゐたのは、市川組の足田道吉の旧僚
 島田康之が、ある日訪ひ来て、君に縁分のある青年一見書
 いた書をよつてくれ、その他も又()かあるから、君の千元を
 程分の某河をさせて居る。まゝかと申すに、此の間に尾井
 竹城と四叔の友人があつた。自合に此の青年一輩の縁分
 があつたと云ふ、ずいぶん彼等の兄の四言と云ふのは、自合の
 流るゝに時、その流るゝ社が、此は流るゝ人の輝
 份を授けられたるが、此は四叔二十一年、其兄の
 年満を命じて、此の持つて来たに、まゝあつた、え、昔三人は、
 シカ、流るゝの深物屋の子供であつた、と思ひ、此は流るゝの本
 名が流るゝと云ふのは、其の親、其の親、其の親、
 う、どうして此の連中、か、市川組の、と云ふ、島田のとも、



此のひそかに忘れたが、自合の島田のときも、一人、此は、
 費を費して、ある程度、まゝ、を流るゝ、確うまゝ、此は流るゝ
 の比やうに思ひ、此の事、この、中年の、不滅、まゝ、持後
 しろ、つ、つ、つ、実、此、現、まゝ、の、比、若、若、若、
 輝、份、まゝ、を、考、き、月、の、若干の、収入、七、あ、つ、た、まゝ、を、
 夫人、や、め、十、田、計、りの、学、費、を、供給、まゝ、を、授、け、る、まゝ、
 此、流るゝ、の、比、若、若、若、の、折、角、自、合、か、世、流、を、まゝ、
 其、まゝ、まゝ、の、か、如、泡、に、浮、いた、まゝ、係、れ、若、若、若、の、追、い、追、
 界、の、跡、角、を、握、け、歴、史、の、画、を、相、あ、る、まゝ、や、つ、ま、る、
 此、流るゝ、の、比、若、若、若、の、まゝ、の、まゝ、の、まゝ、の、まゝ、の、まゝ、の、
 つ、ま、る、まゝ、の、二、三、年、七、十、幾、ひ、を、まゝ、の、まゝ、の、まゝ、の、
 受、付、此、と、し、れ、七、つ、と、名、存、を、まゝ、の、まゝ、の、まゝ、の、まゝ、

のあ人の画をるる毎に自分の懐人びよが、井波七四親七兄
 とも画の天分があつた。兄の四雪の●伊藤君の愛を
 の越中とも花の差の共くはちとすへたことかある。こんの願
 りぬ人扱ひあつたが、其後消息をいぢきへ。その節々
 井波の死もか報せんとあつたが、聞え後して聊う縁圖を
 書きあつておゝ

二月三日

のちを食通と令し、此時自分の幼時ど人
 ともが好きこゝちあつた。いと聞いた。自分いん
 末は食物が好き好むいから、今むも美公
 をふむいむもさ、幼時好むいものとあつて
 七特に言ふをいものとあつた。十歳頃まで
 流しと遊べり、けの中をいむれかゝ、倒打

尾竹竹坡畫伯 尾竹竹坡
 畫伯(本名英吉氏)は備冬以來、
 氣管支喘息の
 ため本郷區達
 菜町六ノ一の
 自邸で療養中
 二月廿五時
 死去した、行年五十九、告別式
 は四日午後一時から自邸で執行す
 る、同畫伯は明治十一年新潟市に
 生れ、川端玉章畫伯に師事し、
 帝展では推薦となつたがその後獨
 力で八次社を創立、個展に精進し
 た、明治時代實弟の國畫畫伯と共に
 國定教科書挿畫を執筆した



相方のものを喰つておれり、口クもよめを喰つておれり、保し
 食物、地方的特徴があり、生長してから、お守つて見ると、
 今むも好むいむもさ。幼時好むいものとあつた。今むも好むいむもさ
 過分ある。果物は梨もよく、グミをぬんむいむもさ、素の
 実もぬきむあつた。カリンに似たカンタンとよめ、大根をお
 ろすやうにおろして、おろしをいむもさあつた。おろしをいむもさ
 と酸味を帯びた、いむもさあつた。●こんの、其後、おの、いむもさ
 よい。梨も果もぬむあつたが、其の梨果、今むもさ、洋
 行も、愛も、お守り、一方とよめ、自分の幼時の梨子、野
 趣があつた。ア、ブ、いとよめ、大あが、あつた。好きむあつた。三
 喜といふ、酸味があつて、好きむあつた。今廿世紀、いむもさ
 よめ、行いん、上品のよめ、行いん、野趣あつた。いむもさ、今廿世紀、いむもさ

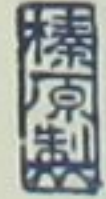
まう比野菜の類に昆布や似比にものアラムと云ふもの
よまひ今のカサヨクもあつたが東京のものはデパートのア
ラムと云ふものを長つたもの異なるといふもの。昔数世に
シメジや初葉もあつたが、今かたよその山菜のやうな大
きき草が大味のものあつた。これが好きであつた。この
東京の海苔得難い。クワイの一種はエゴ取後で里クワイ
はうまきものとうまいものだが、今も東京のオノノ、この
よのあまにもの方がうまい。東京の十マビらふことを
いやうである。葉の類は天竺の砂糖漬をぬん
だもの植物の根を砂糖漬するものと上品の葉ものあ
つたが、勿論取後ほどの産物ならぬ。今にトント見ても
此の運砂糖がよく使用されたに、葉の代りなことを公

海苔

つたがうまいものあつた。魚類はカンの蒸れと云ふんたつ
目か丸七の揚げ物あつた。又此の鰻をいすかきうた。乳母の
手もあるに鯛の刺身が好まわつた。家庭に傳つてあ
るが、自今もあつた。鰻は海産物であつた。海産物の村のあ
ら漁村のあつた。鯛の鰻を只氣印入家前と云ふ。東
北のものと塩漬のものあつた。今も塩漬の鰻を海産物といふ
らふものあるは往々やうなやうなものである。川魚はゴザリ
魚のカサカと云ふ小魚だが、清流に住むものを香味があつた
ものが、取後まのものを捕らうのものを満喫の経験は無つた。鮎
の行儀のものを可とするが、鮎の納屋の油理は納
屋煮と云ふものをぬんた。家庭料理のものは、胡麻

を材料として豆腐は餅をかけたものがちね物か今の時代の家
庭の作つて居る。餅をかけた豆腐が大すきか病の時のこんか
無くしての**日** 団るをてねる。すべし味噌又漬けた野菜か
印時からいぬ物か大根の味噌漬をねる。そのと飲や
餅をかけたものか。これも昔も昔もかきうい。印時から焼ひ
かものか。煮込みも。唐茄子や芋や豆も。の類である
菜と菜とい野菜類のい自分のすべしこの時代のたけのこ大切
る畜肉のもの

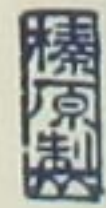
魚かあまき出て煮たものさういとい感した。大福餅
ごあにこんか上菓子のこんか敵あまうの思つた。それか
ら書生時代いき身をやうにしたる牛肉で、又別の肉は
豚と魚のものとを、肉はうすく、ソースやじしるもの上用



七かろういふに、永日い河自夏のあふに、**日**も春を興
へたふにいんじ、胸肉の裏返りぬます。支那料理は、
ごあまの良款のちねるぬます。うに若原に流る時代、
バカヤハテグりを味噌の土遣、漬物をすまふ。ことを先
へて一時のやまにめんが。天麩羅をぬき、うらうらさ
き内は峠の敷吹のあふ彼ん、京都の西側をのり
出奔のいのち、天全の天麩羅をのり、たか、
て、半峰ともたのあふ。馳走にもうて、なひさく、後ま
一つ物さうのねりといの元ぶらる、五日もつた。饅
頭はぬます。うらうらか、後ま在批時代ね、また天の
の差ゆめぬき、うらうら。ごんろ、初のもん、
まふのい、アグ、い、臆、まふ、い、か、い、あ、ま

ハあまの守の所が堅い。名前の料理ハ試みるの所ハあまの
位だが自合の本領ハ酒とあまの味折角の響きも聞
かして公腰のよあま若をのけることか多く、心味ハ
ハ油ハあまの味折き也。

下手の合物ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
だが、菜のよの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
をかくて餅むら、一程の菜のテンパむ自合ハ大ぬき
だが、あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
前ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
つけるの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ

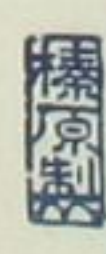


の合物ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
あまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ

鳥や鰯などの脂肉を吟味して、塩を和して粥や飯に
いれる。鯉の脂肉ハ長崎へ行つた時、えびから出す
家があつて、大坂の味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
の味とあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
もの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ
い味のよの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハあまの味ハ

すき衣の膚を棄てず、皮料地としていひていひぬ、こ
を天カスと云ふのであるが、下手なものは七人ものうまのよ
り。大抵は他と云ふことが一つある。是の汁さつり
鹿の皮がある。汁と濁ると飲めぬ。尚、鹿を
又つとめそのまゝのものが、津液は馬の出の時、こを何杯
もす、つと粗公の補いとする。こを、紋等々の丸
大切地と云ふが、よく丸くえん、こをと思ふ。

自合の新肉は、皮は生かす。生かす流の段、空の合、肉の
合、おりのま、いの、お、朝、出、け、玉子や生か
を買つたよ、だが、一向うまうまい。或る時、鹿を
を買つたとき、合、車、時、机の抽き出し、か、出、し
か、刀、削り、ま、を、紙、こ、じ、ん、で、踏、所、の、き、将、回、油



を、取、下、し、合、つ、り、或、ハ、汁、ま、り、け、け、り、し、ル、が、こ、ん
ハ、大、成、の、ど、二、平、の、經、節、ハ、十、日、位、あ、る、の、を、書、生、境
邊、い、ま、ん、を、油、法、の、七、の、が、う、く。旅行、を、どの、ゆ、木、を、
行、木、の、湯、く、法、を、若、一、の、用、ま、代、し、此、こ、も、あ、つ、た、
酒、を、飲、ち、下、物、の、ま、い、時、こ、ん、が、助、か、つ、た、こ、も、あ、る、を、
つ、た。

竹、の、あ、り、道、の、家、の、夏、冬、村、の、皮、を、ほ、く、細、く、切、
て、ぬ、糖、と、和、し、ま、る、ま、く、下、相、み、出、す、こ、も、あ、る、
ち、う、た、酸、味、が、あ、つ、て、存、お、え、う、ま、い、こ、も、あ、る、自、合、
の、脚、四、び、夏、日、の、柑、の、無、つ、た、皮、ゆ、の、皮、を、因、
一、方、法、が、甘、露、煮、を、作、り、不、時、ま、ま、が、来、て、何、
も、下、物、が、う、い、時、ま、ま、こ、ん、を、や、つ、た、が、う、

まいよあぢあぢ

栗、薩摩の芋

越後の夏時酒日の下物、おのものと呼んで蓮
根の割切やウドやエゴや美らぎを出すのが清
涼の趣もあるし、此上るの下物もある。神農本草を
ハ有觸んれ材料れが、田舎の野菜、生むへんふ方
かうまひ。
あまの住ちもくマヅロをへんはるへんふ、
時勝の多いのが好きさうしてトロと無んハ出んが
ハまひ。鮎なをぬちやうんさうれり、はたのここと
敢て江戸に兒こに徹つて物を興しと老へんといひ
こい思ひあひあかし魚高が飲つ尊前を拂
こい思ひあひあかし魚高が飲つ尊前を拂



をさじせやくつをへんふのうまひ。

こい思ひあひあかし魚高が飲つ尊前を拂
まとうまひ、自分ちの癖の氣味、あまの、壽司
屋心此の醋のよさを注文して一杯飲め、んを
我んれ、ビスマース、ヘリングと呼んぬあ、壽司
屋のこま、酢が利いて辛辣味のある。
塩卒の敷し自分ちのち、珍重する、鮎の卵はあ
ふ、塩なつてても味強うけしよまひ。里鮎の卵は
びやう比しを好もまひ、あひこんびもある、但し松前
の格つのもうまひ、さすじ子、ちきりひある。

○易の逆卦に

鬼神 冥冥而福施とあり 澤冬の詩ん

福海在純約、喜盈由矜駭、とあるの易卦を
注し得る、吾が若の典故も、逆卦を未

ある人松の虫蝕害を恐る、驅除の法を問ふ、左の一
語を考へて松根を埋めしむと

謝甘霖法雨、滅除煩惱

此語新書にあり、昔し、マゼンの
法にん

蕉門の十哲皆書をかく、花長まゝを許しと
まゝに風雪をば、巧くまゝ、草並に風雪の
書、一は朝鳥、一句を題しと云々
朝鳥、下すのちくさくと哀ん



破夏の日、野前舞踊の回、巻下る句云々

元日しきんく、あつすかたや、か印花

題を掩ふて、静の舞、次を、転方舞、しと、めを、
ふ

抱一上人の句、優し味があるも、多くは女性向、免

然、俗世俗を元々

萩の枝、美人の腕の、しうへう

鳥追の、是、空の白、く、く、白、白

片豆、ちちり、下、け、れ、の、宮、の、歌、

予、あ、み、子、に、味、を、感、あ、み、子、に、聞、く、句、を

元々、こと、あ、あ、今、亦、彼、ま、か、道、中、り、形、
の、句、を、得、れ

と合ふ子斯のまゝれぬ葉山子凡

古漢を好む子のあま山子の句

葉山子よく静坐しての姿

豊後守の田の南のあま山子沈み居り

御室の法印のあま山子の句

昔一為頼の志を唱えて

いづこしか身をばよせまじ世の中に

志をいとはぬ人こそけんが

とよあは人の志人をなすの志一かくのこことれ

あまの千代の句

根切れぬ物あまの枯尾花

とよあはの境を詠する句



凡ゆるい何んぞとて説く甚れ難し、若草の生活
凡ゆるに没頭す、彼人の心身を解する、異士の
を得ず

さあ天に凡ゆる者も亦凡ゆる、凡ゆる

花の仲祖の肝臓も、造化の地を四時を及と

す。えり所花もあまの心月もあまの心

月もあまの心月もあまの心月もあまの心

余動に等しく、心は花もあまの心月もあまの心

又花もあまの心月もあまの心月もあまの心

均れとさす。

新川柳も味あふき老句あり

つふぬんらん今度もあまの心

若きうか時い時を遊つて行き

心中のとう寂きは敵回士

様割に過ぎた位牌の成れの果

あ春の日にちろくの底氣を極

青雲を又んが後玉のつゆ人さ

子親のあまの子の句

十年の狂態今にあらはれ 自叙

あまのあまの白鼻あつける浮世さ

あまのあまの白鼻あつける浮世さ

身かゆのふと愛油して忘るる古歌の

庵いさき湖やいさき山川の

淡き瀬うこそあは波いれ



思案浅きこころを 後言ひある 左の後七言さう
とあま味深し

睡者のほし魚たまる

らるるの舟せうさ

かたみとをなすかのこころは 春の花 夏はと

こころは 秋の七みりさ

らるる七味茶葉の 只推訓を 読味しるるは

や、らるる又歌ん

つみしるみ言えさうく 秋のを記さるる

わうとあまこころは 武蔵の原

秋詠とあまも 只三昧入るとんは 地句を

得ぬき歎

のほろあはれ^天に吾者として日本をなげり例の無い人である
ことを此頃よりしりしと感すま何の人か藝術の
心身強り公士より才多し人か、死後無一物も遺
つるも唯の英とすま何の人の金とす
やうな道楽のこい人か、若しあつとまんか善後存
位とすらうか、土地を賣つた家をして別荘
を住居したことを、流るる金を云いするか、可なり
其の金を扱ふにまれば、或る時代より藝術の為舞
台をまねた。随分祝儀の為の金を教へた、長久の
家を築くより中見の子の士行を教育する為
の寄るの文書ある例を兄の禮行届の世話を
一に、失業の門人をも救ひ、道徳が流るることに



切つて窮すも哀と治めればよかどんあつたか
い。ちの久の秋園とらいつくあつた康の賞金の性質
に属するものといつて窮してゐる文人も教へたつて
自かも取ること無つた。善財の念するも取あつた
思はんもの。ちの人の子が無く又相續ぬ者と絶つま義か
あつたか身後の同輩が善財かあつても絶つて世
のまの境遇がある。馬鹿道楽をやつて善財を教へた
うらことまも誰かかめつたものもあつた。保し
ちの人のことまも花街を生命とする人か、若し道
楽と云ふことが出来ぬか、まの道楽もあつた人の
古稀の記念に演劇場か、を住居したの決つてあ
の人もあつた。まの深いつまのり、此のまもま

八千倍の寄附を以て金銀に土地の家族を固むるは
わづらひとせん。披に。法則持物故の人の為めと云
ふもその人自ら設ければよき事である。持物故の出
来に時々の人の寄附が既十萬石と云つてある。彼
をも永久に盛らうとする為め向上金を設けようとする
あの人のありやうと云ふこと。寄附に。是れ十萬石
よりも更に多しむるも大なること。法則持物故の
故の印税は是れ十萬石と云ふ。他の若し権も
悉く寄附せしむるも。あの人の左右を待てし山田持物故の
法則持物故三十萬石の資金を持物故の維持費
に用ひ附する積りあること。故命のうらみ。是れ
其の事。しるは。不動産の熱海双杯合と云ふ

所の悪宅を以て合算せしむる三十萬石は、
金の積りであるやうな計りである。是れ未だ人の
手なつて地。故の維持費に偏入するべきこと。故の
田も未だ人の境遇も亦し豊かじ。少しの利殖も
多く寄附せしむる努力である。双杯合と云ふ大心
保する。是れ早相持物故のあり。是れ維持費を
その故のから出せしむること。是れ故金の
其利のを充てしむること。親族の故金の
九くあるが。法則持物故の定まりである。早が
こまに届く。是れ早相持物故の行ふ。是れ榮の
補助する金の。故の。是れ周の。用意の
ことと云ふ。是れ早相持物故の外と云ふ。

赤道より北へ傾いた方面を北極の充分に分らん
 と云ふは湯るる。此の圖刻向を今計の棚部をも
 やつた移向、斯く所感も録す 六月六日

六月の十九日は 皆既食です

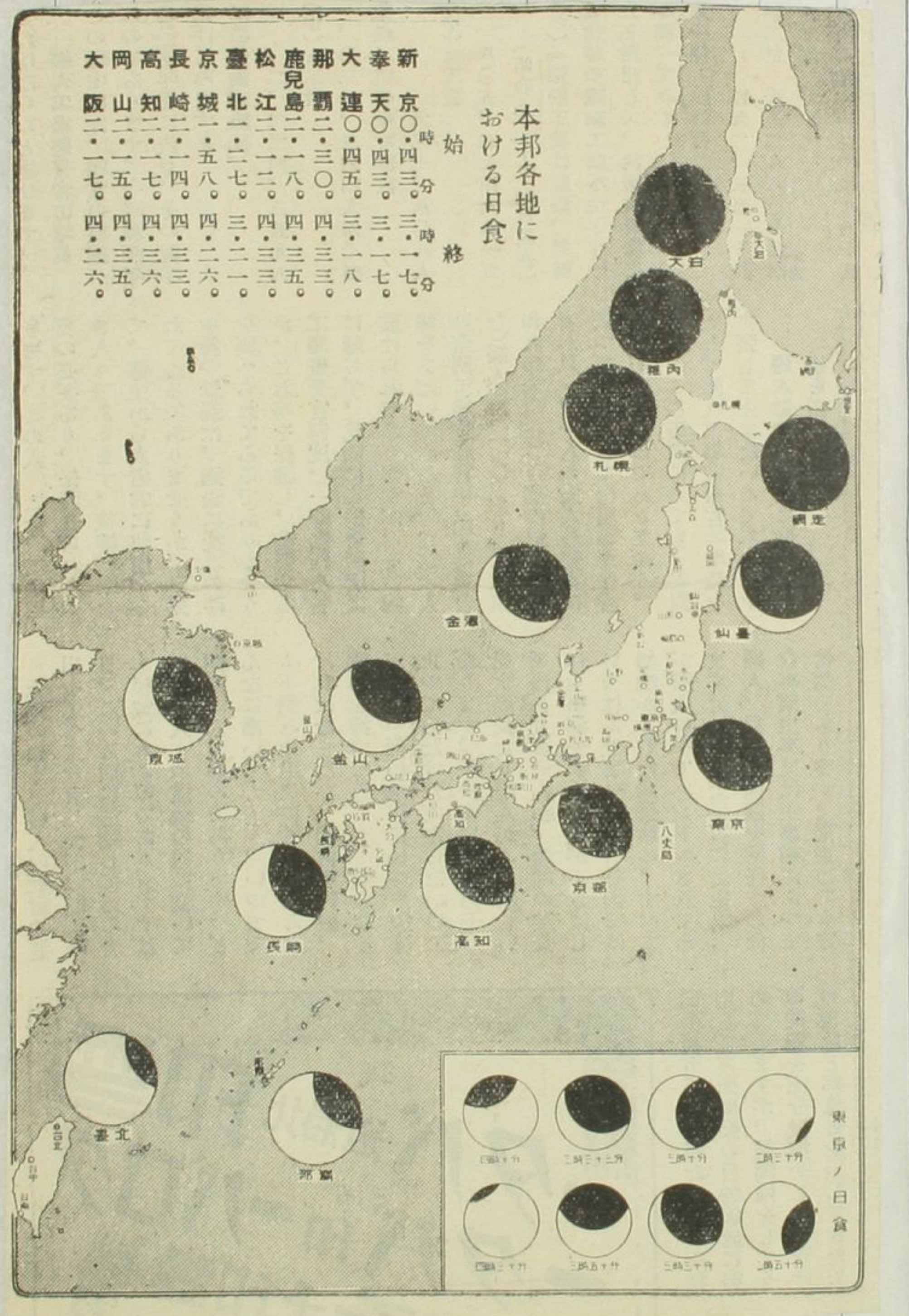
美しいコロナを観望させら
 六月十九日は皆既食が見られ
 ます。月は太陽に照らされて反
 對側の空間に長い影を投げてお
 るが、この影が地球に觸れると
 それが日食になる。つまりその
 日は太陽と月と地球が一直線上
 に並んで、晝の月影が地球上を
 過るのです。

六月十九日の日食は日本時間
 及び、西はヨーロッパ、北ア
 リカの北部から東は太平洋に亘
 る地方で、一日中殆ど陸上ばかり
 に見え、その見える範囲は北は
 カナダから北極を經て南はブラ

本邦各地に おける日食 (表内からとく)

地名	開始	終止
京都	二・二六	四・三六
金澤	二・二四	四・三五
名古屋	二・二七	四・三六
富山	二・二五	四・三五
長野	二・二六	四・三六
新潟	二・二五	四・三五
東京	二・二〇	四・三八
八尾	二・二三	四・三七
秋田	二・二三	四・三三
青森	二・二二	四・三二
仙臺	二・二七	四・三五
札幌	二・二三	四・二八
根室	二・二五	四・二八
大泊	二・二五	四・二八
釧路	二・二四	四・二八

コロナは皆既日食以外には絶対
 に見ることが出来ません。皆既
 日食のヌブラシ美観は全くコ
 ロナの美しさによります。コロ
 ナは肉眼でよく観測が出来ます
 先づコロナの色をよく見ること
 それから形をハッキリと観測し
 黒い月の直径に比較してコロナ
 の横つてぬる大きさを出来るだ
 け正確に計ることです。皆既日
 食を見たりは是非コロナの大き
 さ、形等をスケッチして下さい
 (表其他科學知識より)



○日本橋の渡り河岸の荒い此の是迄の家が
大穴の火後氏を教養し此の徳へと無つれば此
以因を得てブラウく歩いて又此に於ても満洲の時む
は浸んばかりの聲を聞かぬ。此後初め出来ぬ
公國に入つて見ると、年産のいテニスゴートが出来ぬ
多く針葉材が植へる外、日ごとく磁の造園の
表匠の見受けやうに、唯此ぬ煉瓦の鐘撞
臺のやうなものも置つておれ、何うと見ると、えんぬ
初年洲松使の設けよ此時、魔念の守りあつた
飾の建物む、何んの日も七主のいふ地が取り毀
つことを惜んじ、置いとあることが、櫻北に伝つて
るを得れば、此の公國は、大橋の夕もとあるの國を
出

と橋の向けし歩を福す、橋側は大きな碑が立つておれ、
佇まして後人びとを、零祭の當時庶民の火を避ける
橋上は、齋集し、此のいふ、今も危険の事であつたが、幸
ひも、橋上人々無事であつた、神助におつた、又のことか
刺さるゝぬれ、當時の想ひを、我栗を植へ、浮き
つた。

○又原房にゆか、其の教令、事件、此の今、運命の
知ん、身の分、此のいふ、其の、其の、其の、其の、
此の、此の、此の、此の、此の、此の、此の、此の、
モット、深の、深の、深の、深の、深の、深の、深の、深の、
し、此の、此の、此の、此の、此の、此の、此の、此の、
福、此の、此の、此の、此の、此の、此の、此の、此の、

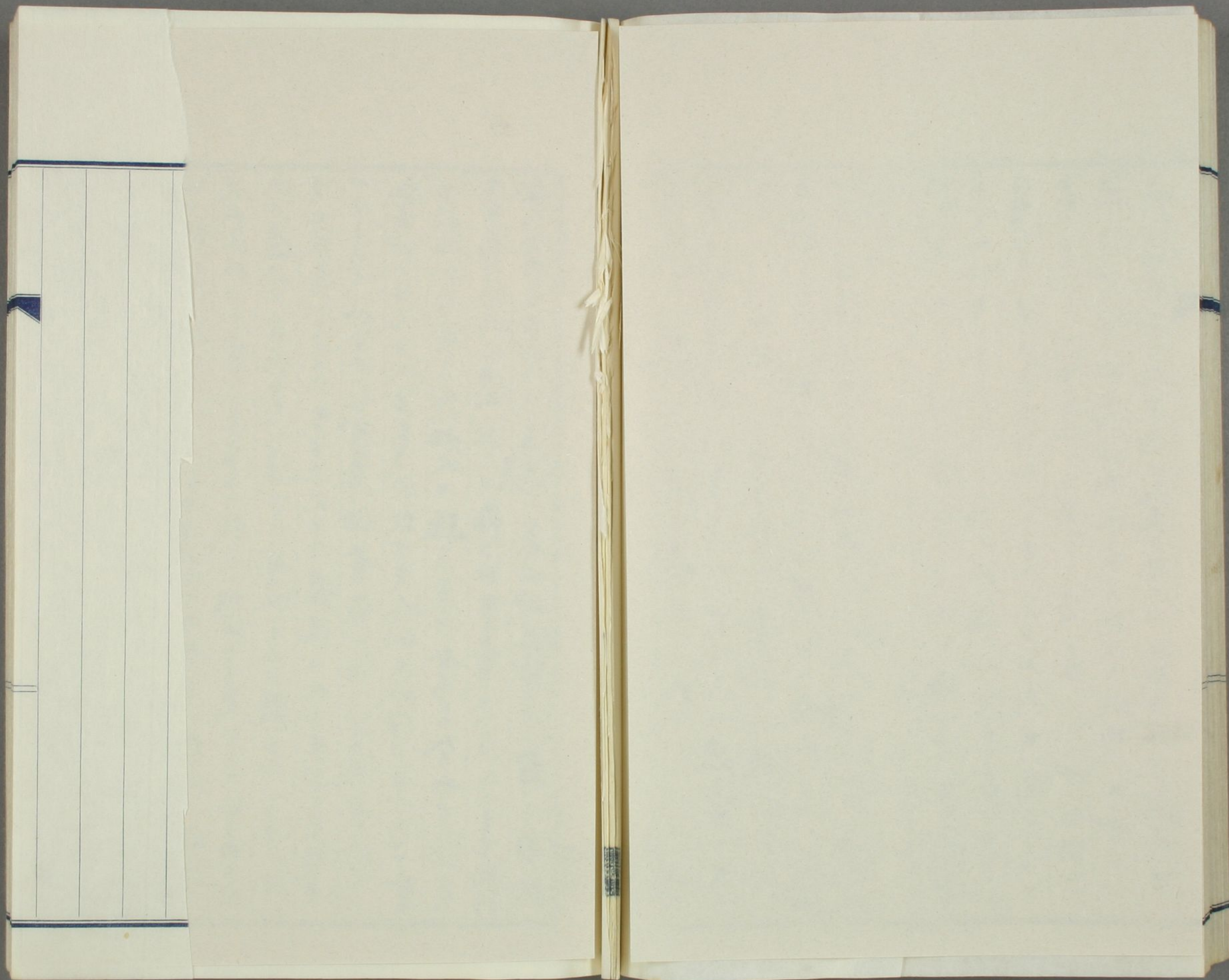
後りも有りて振ると云いんれが、そんり事なまひあつて。彼れが
かく多くの金を散すん、歳久の千の八ること、勿論がある。政を
今全部を手中に握ること、敢て難くないものがある。目下は
人間のまさをうけて、金に権力を得ると増長して死望を
企てるの如き、久松の如き元来政流経歴を有するものは、寧ろ
予仲面的の身命のよる人格が、あつて、自から増長
を測ることが出来ず、大切な場を以て地金を暴夜を
このい死多の失収と、**●**振ること、**●**不忠儀も、
彼れに、此等の現産家が、あつて、ことごとく、其の死を、**●**借金
持て、あつて、云いんて、あつて、あつて、大の腹を、**●**七転八起
が、彼れと何んとも思ひ、大の山師、**●**其の相態、**●**似て
い、怪あつて、あつて、**●**殊、**●**一と、**●**儲けを、**●**せん

此れ、此の事件の資本家と、その事件成り、**●**内閣の首班
れん、**●**と期、**●**れ、**●**えん、**●**かえん、**●**えん、**●**南、**●**花、**●**坤、**●**一、**●**擲を
賭する、**●**大山、**●**師と認め、**●**ること、**●**決して無理、**●**い、**●**彼れ、**●**と、**●**其、**●**物
人、**●**あつて、**●**海、**●**向、**●**候、**●**こと、**●**と、**●**無、**●**縁、**●**の、**●**こと、**●**と、**●**あつて、**●**其、**●**れ、**●**大、**●**び
心、**●**政、**●**海、**●**と、**●**身、**●**を、**●**投、**●**け、**●**野、**●**望、**●**う、**●**こと、**●**と、**●**長、**●**こと、**●**と、**●**思、**●**え、**●**女、**●**保、**●**し、**●**と
人、**●**と、**●**同、**●**時、**●**に、**●**気、**●**格、**●**の、**●**あつて、**●**政、**●**治、**●**家、**●**が、**●**あつて、**●**思、**●**ふ、**●**こと、**●**と、**●**次、**●**の
この、**●**こと、**●**と、**●**あつて、**●**自、**●**人、**●**の、**●**此、**●**人、**●**と、**●**知、**●**ら、**●**ぬ、**●**ゆ、**●**え、**●**い、**●**行、**●**う、**●**為、**●**候、**●**儀、**●**中
の、**●**昇、**●**儀、**●**と、**●**然、**●**と、**●**あつて、**●**其、**●**及、**●**早、**●**大、**●**の、**●**要、**●**件、**●**が、**●**二、**●**三、**●**が、**●**而、**●**入、**●**り、**●**た、**●**こと、**●**と、**●**
と、**●**あつて、**●**思、**●**ふ、**●**其、**●**及、**●**早、**●**大、**●**の、**●**要、**●**件、**●**が、**●**二、**●**三、**●**が、**●**而、**●**入、**●**り、**●**た、**●**こと、**●**と、**●**
ある、**●**六、**●**大、**●**浪、**●**行、**●**を、**●**候、**●**と、**●**此、**●**人、**●**を、**●**任、**●**責、**●**の、**●**別、**●**在、**●**に、**●**訪、**●**れ、**●**こと、**●**と、**●**も、**●**あ
つて、**●**其、**●**れ、**●**何、**●**ん、**●**の、**●**境、**●**も、**●**久、**●**な、**●**か、**●**ま、**●**し、**●**政、**●**治、**●**家、**●**の、**●**入、**●**ら、**●**ぬ、**●**時、**●**は、**●**あ、**●**つ、**●**て、
自、**●**分、**●**の、**●**誠、**●**意、**●**人、**●**も、**●**あ、**●**つ、**●**て、**●**彼、**●**れ、**●**の、**●**お、**●**お、**●**の、**●**壯、**●**大、**●**の、**●**あ、**●**つ、**●**て、

といひ別名地ハ六甲山の林ありあつて山中の如き織及び
 是より引のちあり此の地域内海を岸より流れて政神の宮を
 造つて居り六甲を而して建てるんれヤンプ式の二階建
 の家屋ハちうく大規模のこゝを、其の用材●に皮のきのま
 ずか一切カンナを用へて居るぬ、野趣あるこゝであつた
 が、橋本におさりのいゝとむ六甲の山に對してハまゝ初
 和さるゝとむあるれ、主人があの山に庭中りを造つて居
 るが、名の藝を極めれ所、障子、柵、木、欄干、可成
 歩きこゝへ入る自今ハ感服するゝとむ、か多かつた。而も是き
 日五つて葉の内へ主人の平元とて唯れ先もするゝの
 子に説のいみ言を一口も吐かむかつたこと、木、欄干、可成
 感服



此の昔ハ大坂の屋敷が豪大を極めれと云ふも、恐
 らしく二人ふことい出来うふれむあふと思ふれが、あ
 黙りし一語も発せず静かにおもひに彼人の肚裏
 又の何があつた計りおんと思つたが、怪物と云ふは彼
 人今も怪あむも、喰れむむ無●ひらめきを、地盤
 に見た。



〇人の裏面の内容をも、其人の家族をも、父か母か、
いふが、想像を今より裏切らざることを除くべく、森
三之と云ふ人の福山藩の庄者か、伊津蘭軒や狩谷庵が
といふ深い関係がある、三之の筆蹟を兄と楷書は、
兄の位にかき行書をも、概より以上とも兄と云ふ、
此人の遺書は、こんむ、千うボラ、出ルよ、
其の校勘や書入をも、兄と云ふ、
いふよ、妙書家が、
おん海へてある人があるが、
てりり、
て生、
的の書きつけると、

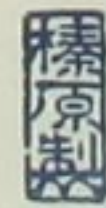
森三之

れは流浪十六年、
其方の娼婦、
から様下、
流浪先、
江戸、
就行を、
情、
人があつて、
此、
と、
の技倆、
えん、

果たりしとあつて皆貴重のことである。

森の舊蔵書目を註解やつて自今の眼に入つたことよ、
言義校正と云ふ二冊の寫本は秋山陽自筆と注してある
ことであつて、自今の寫本も不思議の感を抱いて云ふ言
義と云ふ一切は善義のこととて、山陽が佛書と自今し
たことか、思ふかと不思議の感をも、あつて、
て、取出して貫山の一現し、乾坤二卷の四花書の中ころ
から坤卷全部が山陽の筆寫に係つたものとて、
尾に未林約之の題後があつた、山陽の自寫と聞て、
讀んだの如くである。

乾卷大智度論以下此全卷皆秋山陽子成
若在東都之日所傳書者山定可不變花乎



約之又志

私に於て各頁と註解して見れば百餘枚なるが、
約之の詞後と云ふが、概あり楷書や森立之の楷書は、
て見ありが、さうやうの直感した、
私に山陽の書かと信ずる人があつたら、私に多分不
あつた。此寫本の甘花書上半は森の門人の筆寫に係
と約之の詞後と云ふが、とんと山陽の筆寫と見
か優るとも、
あることと特記してある。さうして、
陽が古年時に作らして、生活の爲めに、
ことが、
即ち、
感せらるるを得

る。前年中井敬不所名の梳高自字の古京遺文の
内三枚を山陽の守りた交が、其の意を記し、山陽の
戸の此の津軒を梳高の文とすりて、其の抄字を
を手傳へしといひ、其の想像して此の古京の
字の意を記すと、山一く、其の事があることか、此の山陽と
して、其の意を記すと、其の事があることか、此の山陽と
を記すと、其の事があることか、此の山陽と

○此の安田部抄を複製するに、今この序の、山陽の微時
大概家々山陽の、同方の内一二を記すこと左
の如し

一 兩雅注疏 六冊

素坊抄を記す、其の事があることか、此の山陽と

昭和十一年六月十三日記



まじり、梳高の校誦書入満了、左の後、其の

9

文政十三年、只昌平、其の梳高元繁九行
本校誦、滋江道、純對、後、其の事があることか、此の山陽と

卒業

記す、

とあり、梳高の花出印の、其の事があることか、此の山陽と

一 傳名歎聚鈔附録

一冊

此の時令、樂也、其の梳高の稿本也
標志に、其の梳高、其の事があることか、此の山陽と
其の事があることか、此の山陽と

振方の茶下り、別に「燈台録」の
名七條紙あり

一 鐘合松屋山に記

望之の表書きに「有る」の真意と異
す其末の名乗りの前の名と又く
後名又りて東慶寺の鐘が作主の
並山本主寺であることと云ふす。
古書之庫の巻記あり

一 厨金澤文庫日記卷子本

山号 一巻

首部 巻尾の左の識



あり

文永七年七月廿四日於京北如意坊
中陰之旅亭抄出之畢

今回の貴族院改革運動の中心は、長近衛文相公である。公の貴族院改革の意圖は昨今の思ひつきでない、具體的に第一歩を踏み出したのが昭和二年十月の火曜會の設立にあるといへよう。當時内閣以來政治の取引團體の觀あつた研究會は復讐の體積によつて非改革派、非改革派の抗争激化し輿論の中心にあつたが、研究會相談役であつた近衛公は突如として一條貴族院、四條院、廣嶺忠義侯、中山輔親侯、中御門經基侯等とともに研究會を脱會して間もなく公侯爵のみによつて火曜會を設立し貴族院改革に乗り出さうとしたのである。元來公自身が各方面に對して改革意見の多い人だから、數年來の國家改造の機運の中にあつた公の身邊は常に軍人、新官僚、その外改革分子によつて圍繞されてゐたから、自然公は國家改造の第一歩目として見られるに至つた。岡田内閣の後継者として西園寺公が近衛公を推挙したものの特殊な地位を活用しようとしたからである。この地位にある公は國

火曜會

から貴族院各派に改革

家改造乃至庶政一新の機運が華族院に對して、あるひは貴族院に對して何を要求してゐるかは知悉してゐる筈である。公が「貴族院もまた自ら改革して時代の要求に副ひ庶政一新に貢獻すべし」との決意を抱いたのは當然過ぎるほど當然のことである。かくして改革の聲は公の屬する火曜會によつて上げられたのである。

機運が華族や貴族院に對しても相當の改革を要求して來るであらうことを公は覺悟してゐた。

革新の時勢に先行窮極は防禦の妙卓見近衛公の

若し外部からの改革の要求が、貴族院の改革を促す事であるといひ得るならば、公もまた「貴族院改革は改革を自ら進めよ」といふ方針によつて及ぼす影響の方が重要である」と語つてゐる。この言は、恐らく今回の改革の窮極の目的を示してゐるものと思ふ。

貴族院

各派に改革の決議案を

提出するに當つて政府が設置する調査會に委員を送つて適度のプレキをかける方針に決定してゐた。政府は議會終了とともに調査

手 認識

心はどうかであらうとすでに貴族院は自らの改革を政府に要求して庶政一新への認識を示してゐる以上外部から非難される懸念がなく

- 一、公侯爵議員の世襲制を廢して互選制とする
- 二、有爵議員の定員を各府とも減員する
- 三、勅選議員に任期を付する
- 四、多額議員の職能代表制化の四點以上には出ないが

改革せ

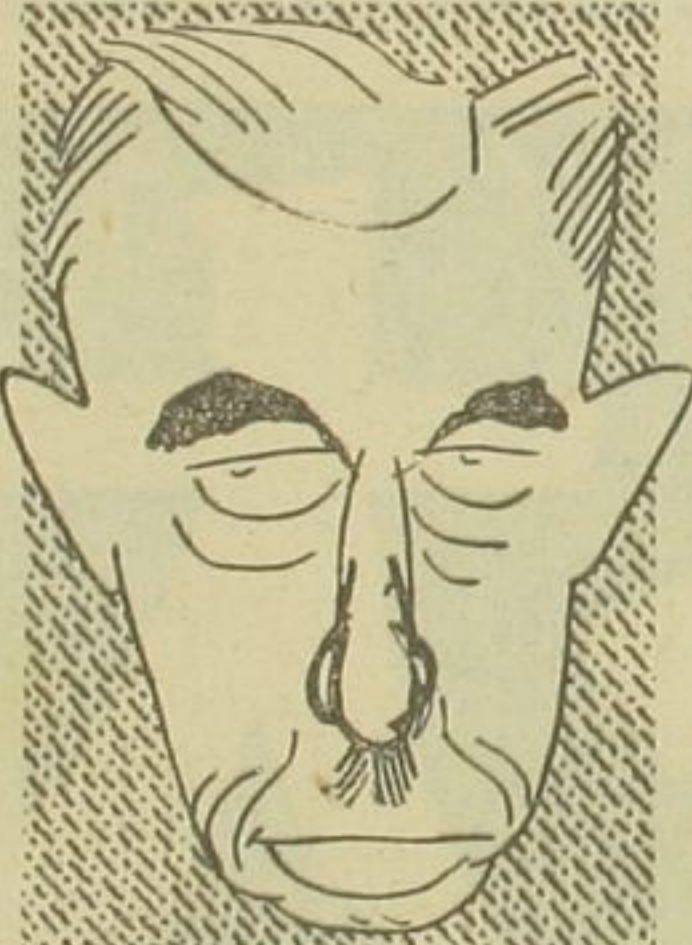
とほいへこの程度

なつてゐる。然るにこの調査會に参加して改革案の立案にあつたれば委員は政府と貴族院との間に板挟みになることは必定であるから委員を買つて出るほどの人もないのが實情である。

然も改革案は貴族院令第十三條によつて貴族院の議決なくしては實現せぬ以上貴族院は調査會

に直接にプレキをかけなくとも貴族院自體において意のままに制御出来るのである

にも關係があるから従來とて一指も解れなかつたのであらう。たとへば貴族院令第十三條「將來此勅令(註貴族院令)ノ條項ヲ改正シ又ハ増補スルトキハ貴族院ノ議決ヲ經ベシ」の削除または改正の如きは直ちに行ひ得る事ではなく、その權限の縮小乃至變更もあ



るので、この規定があるがために貴族院の改革は困難となり貴族院が益々厄介物視されて來るのである

貴族院の役は以て王室の屏翰をなし保守の分子を貯存するに

止るに非ず(中略)しかして勢力を阻害するに至るのである。わが國議會制度のお手本である英國の議會が一九一一年に議會議法を制定して、上院は純然たる抑制機關としてしまひ、貴族院に對しては上院は修正否決の權限なく、法案に對しても下院において連立三會期滿二年にわたつて可決したもの

衆議院

と全く同じ權限

を有し衆議院の豫算案先議權すら

と皮肉つたが、貴族院が衆議院に對する純然たる抑制機關として存在するのなら別問題である。現在のように對立機關として存在するならばわれ／＼もまた「シイーを眞似て「貴族院が衆議院と……」と嘖する時代が來るかも知れぬ(漫畫は近衛貴族院議長)

東京

豆科學

蛇には耳がなく、舌で音を聞く。その舌の先端たるヤ、非常に鋭敏で、極めて軽い音の振動すら聞き逃さない。

蛇の短い舌は、シラフ(きりん)の長い舌に比べて二倍の推骨を持つてゐる。

蛇の死體は、時々、自然に火をする、火葬としかれるわけではあるまいが、體内の脂肪と、空氣中の酸素とが、自然に結合して、かゝる現象を生ずるのだ。

米國主要農産物、玉蜀黍(トウモロコシ)の約四段、即ち約四千平方メートルの玉蜀黍は、その澱粉中に、ナント、三千トンの水を放出(蒸散)する。

椰子樹は、風々暴風のために、梢が地面に觸れるまで曲げられるが、決して折れない。

フランスのバリ警視廳には捕鼠用に訓練された猫群を飼つてあつて、市民に買賣してゐる。かうした猫群が、日本の警察にも居れば、ゲルトナー氏(廣瀬大福)事件の被害も、未然に防がれたかも知れない。

夏は涼しい

扇子と團扇

おもしろい戸籍調べ

夏になくはならぬ扇子と團扇は、大分古い時代から用ひられてゐた

てかへるのは、親骨に鉛を入れて重味をつけてあるからださうです。尤も京都の舞扇には鉛は入れないと申します。

☆團扇

うちには平安朝に生れたもので、陣中や大狩の用ひた軍産團扇紙で張つた紙團扇

反古紙

塗つた柿團扇、一名に澁を、貧乏神の遊團扇、それから文政、天保頃流行した組團扇、九折紙を圓く切り、紙を張り漆で黒く塗つて、柄をつけた組團扇(繪)團扇、長い柄をつけて消防に使つた所もあります。又紙に漆を塗り水をつけて涼しく、と標いだ水團扇とかずゝありました。

産州は

奈良の瀨草が主で、したが、寛永に入つてから俄然江戸團扇が全盛になりました。これは元祿の頃、畫家の鳥居清信が團扇繪を描きはじめたのをきっかけに、安永から文化年間にかけて寫樂、嵯峨、豊岡、岡貞の繪師が盛んに筆をふるつて、役者の傾齋などを描いたからです。寛政三年には

華美な男女の

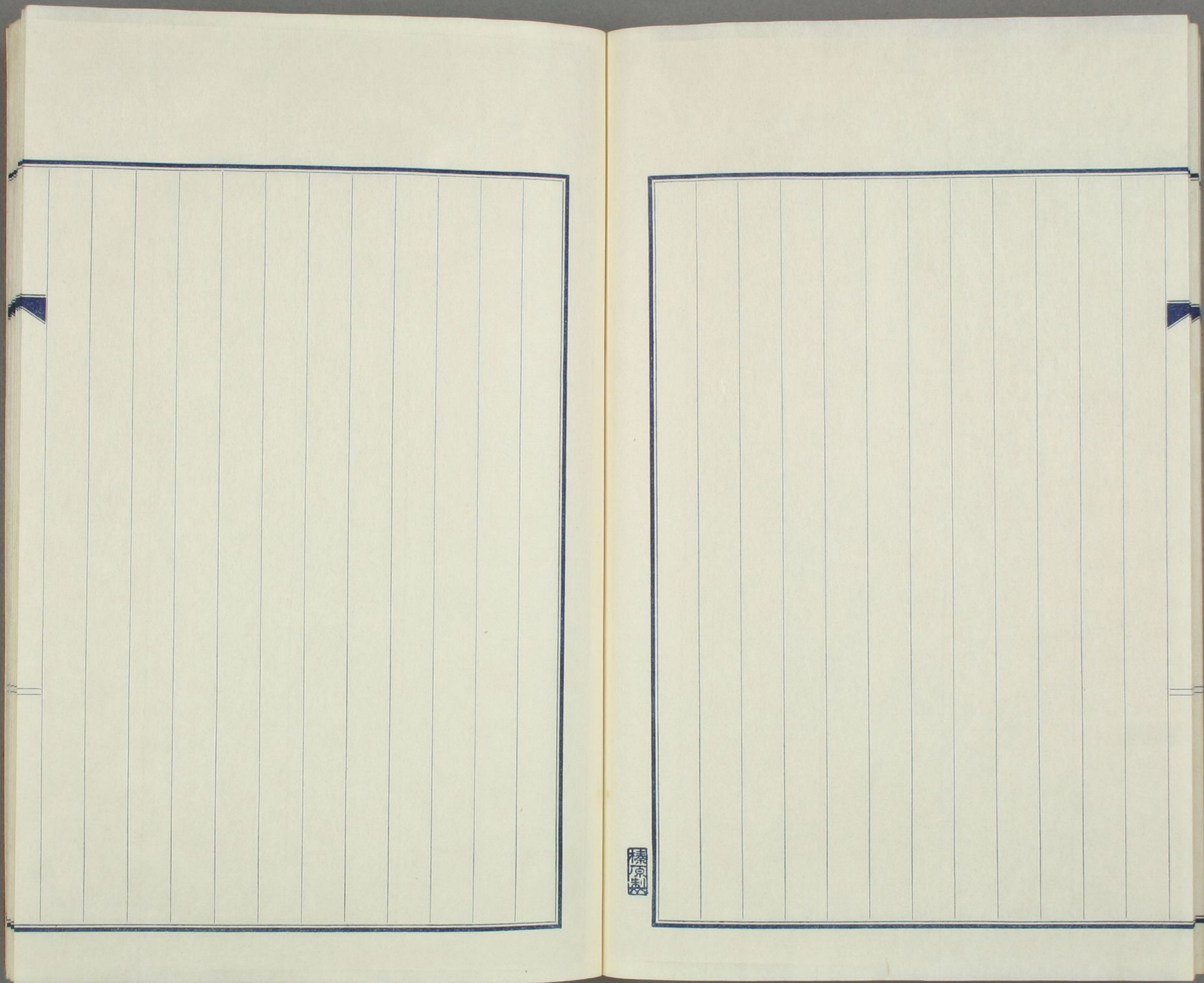
風俗を描くことは禁止された位ですが、からずい分、うちはは美しい繪がかゝれたことせう。昔、六月に富士登山をした人々は必ず江戸へよつて浮世繪と江戸團扇を土産物として國へ持かへる習慣さへあつたのです。それから横に廣がつた團扇が最近のやうに縦に長くなつたのは明治以後のことです。とにかく、うちははもせんすも、形には大した變化なく風をつくつて、涼味を呼ぶことは平安時代以來その役目でありませう。

會扇と杉扇が

あつたのですが、後になつて、かはり、末廣、中腰とも呼ばれる紙扇が生れました。繪扇、杉扇が冬扇といはれるのに對して、紙扇は夏扇と稱せられました。元祿、寶永年間のお江戸には、元祿模様の浴衣に白足袋、雪駄ばきといふ姿をした團扇紙管りが居りまして、呼ばれるとすぐその店先なり、家の入口で扇を作つて賣つたといひますが、寛政になると京都、扇が深山入つてきたのでこの扇屋さんはなくなりました。扇子の骨は十一間と大体今でもきまつてゐますが

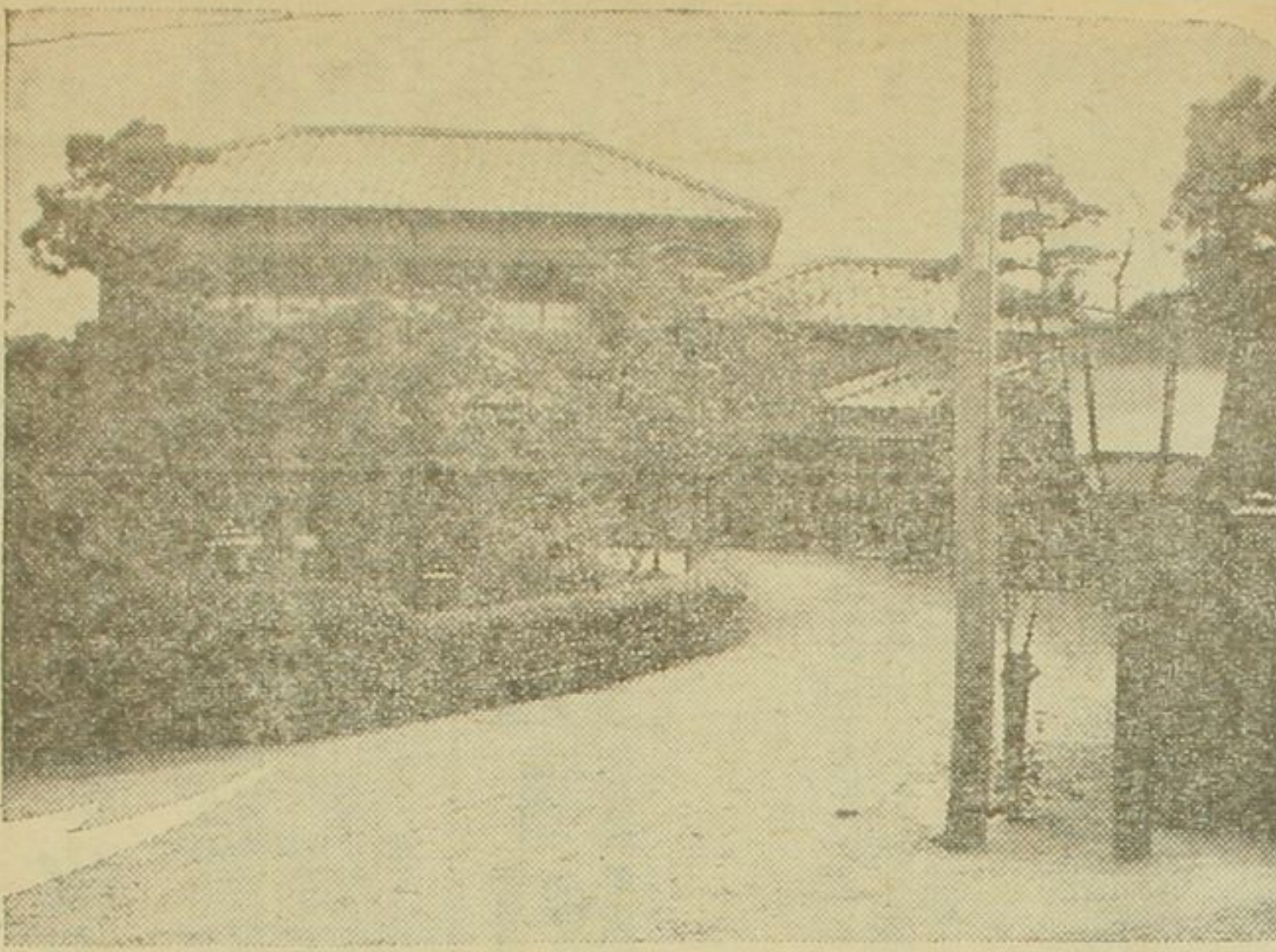
殿中と

登城のときに用ひる云つてものは十三間で明治頃にもこれがありました。團扇は美しいものであればクル／＼舞つ



東京製

以下
5丁
白紙



色里新瀉の誇る名物 “會々樓が感慨深や轉向”

時代の流れに沿ふて近く廢業

美談・建物は寄附

先代の會々樓もつて新瀉市の歴史と誇りはれて
以来百年余、現在の會々樓を改名
繼承して以来四十年の古い歴史を
貸座 數々樓か時代の流

れと共にその歴史を消しモ
ダン遊りに改築されることになつ
て世人の感慨を深くしてゐるが、
この改築を遂げて現在の建物が祖
先の菩提寺である市内西郷通り三
番町曹洞宗瑞光寺に無償で寄附さ
れるといふ聞くも床しい美談が生
れてゐる
會々樓半會治さんが先代の會
々樓を繼承し現在の場所に其の
名も會々樓と改め
幾星 霜、幾多難難に陥
りつゝも遂に今日の大をなした
この傳統を誇る會々樓も時代の

この一代で廢業

愛見が利用出来るやう改築 父性愛轉向に點綴

會々樓の改築をめぐつて當主虎向
さんの天晴れ父性愛が發揮さ
れてゐる、即ち虎向さんには三人
の息子があつたが、他の方面
に活動してをり現在の貸座敷業は
當主虎向さんの代だけで廢業す
ることになつてゐるが、かうした深い
家庭の事情から多年の懸案であつ

た、この建物が又愛見氏の計畫し
てゐた
設計とピッタリ合つてゐ
るといふのも何かの因縁といふも
のである、愛見氏もこの會々の建
物は、心情的に感懐し檀家と相談し
たが勿論いや願のあらう筈もなく
こゝに目出度く話もまとも歴史
あるやうな建物が
瑞光 寺の庫裡大書院とし
て移されることになつた(寫眞は
會々樓)
愛見氏は感謝の面持ちで左の如く
語つてゐた
現在庫裡に當つてゐる所も當時
(大正五年)現在の四ツ屋町にあ
つた家主川島十次さんから寄
附されたもので、當時この庫裡に
は妖怪が出ると思はれたもので
す、丁度この庫裡の改築の話が
出た時、會氏から寄附のお
話があつたので喜んでお受けす
ることになつた譯です、全く私
工事にかゝるのは今月の二十七
八日頃の豫定で八月一杯には一
部若干を改善して出来る心算
です

た改築の七美を施しつ廢業し
ても息子達の利用されるやうにと
考慮したもので新らしく出来る建
物は専ら京都の茶屋風なもの、東
京の現代式なものを取入れて造ら
れるもので現在の建物より若干縮
小される
會氏は語る この話は以前

より計畫して居つたのですが、
色んな障害にはどまれて實現さ
れなかつたのですが、今度いよいよ
断行することになつたのです
丁度祖先の菩提寺である瑞光寺
で庫裡の改築をされるといふ話
しを聞いたので借越ながら寄附
を申し出た譯です、總押は
二階建の百五十三坪です永く目
分の懐しい建物が残つて行くとい
ふ事はこれ程嬉しいことにはあ
りません



話の庫

西洋今昔物語

文春社刊 六月刊 花巻の巻

市島春城

★ め取り喰り喰夫太義撰勝 ★

一、蘇生した死刑囚が出世した話

解剖學の大家ジャンカー氏は、ヘル大学の理科教授だった。専門の學問が學問だったから、死體の解剖に當ることも決して珍しくはなかつたのである。...

たまたま寢室の隣の一間へ運ばせて、臺の上へ載せておいた。さて、晩餐後の教授は獨り書齋に入つて、書見やら明日の學科の下調やらに没頭したが、それが思ひの外に長引いて、十二時過ぎ、一時、二時と、今ははや三時にも近くなつたのである。...

音を聞いたやうに感じたのだ。氣のせみかしら？ 靜かに耳をすませる。いや、確かに物音がする。人が歩むさまにも思はれ、又人の佇むやうな氣配にも受け取れる。しかも、どうやらそれは、死體を置いた隣の室から聞えて来るらしい。...

人か、魔か。しかも教授がじつと監視めると、その怪しの影もまた身じろぎ一つせず、鋭い眼光で教授を視つめてゐるらしい。手燭のひかりを避けて、その身體は絶えず音もなく右へ右へ、或は高く低く動きながらも、その眼は油断なく教授の舉動に注意してゐるやうである。...

★ れき出き突をルービシや冷てれさが説 ★

れば、再び囚はれて死罪となることは明らかである。此の上は、彼の身を安らかに保たせる唯一の徑は、人知れず夜明けぬ中にへールの都を逃れて外國へ落延びる外にあるまい。けれども、都の街端れには數ヶ所の見張所があつてその目を偷むことは頗る難しい。思慮深い教授は、しばしがほどはあれやこれやと思案に耽つたが、やがて、醫師といふ自分の肩書を巧みに利用する方法を思ひついたのであつた。

「よし、教けて上げやう。その代り、暫時の間、君は私の命令通り動いてくれ玉へ」

手早く身仕度を整へ、少年を促して、ともどもに戶外へ出た。街端れまで来た頃にも、街はひっそり閑と静もりかへつて、響くものといつては唯二人の靴音許りである。二人はやがてのことに、闇の巷に明るい燈火を輝かせてゐる見張所の前を通らなければならなかつた。果して、役人は兩人を認めて、「何者か」と誰何した。

職を賭しての芝居ではあつたが、豪膽なジャンカー教授は、こゝとさらに急ぎの體を装つて、口早に、

「自分は病家に行く所だ。かねて治療を加へてゐる患者の家から

危篤の報に接して急行してゐるのだ」と答へた。役人が答へ手の顔をよくよく見ると、へール市中に隠れもないジャンカー國手である。従つてゐる少年は、恐らくは書生であらう。かう信じた役人は、禮を厚うして、直ちに二人の通過を許すのであつた。

もう大丈夫と見極めのついた教授は、しばらく歩いてから、少年に囁いた。

「もう不安な事もなからうが、併し此國に在る間は油断はできぬから、夜明けぬ中に一哩でも遠く落ち延び早く外國へ行くのが肝腎だ」と、旅費としていくらかの金を與へ、且行く末の事など訓して、死んだ心算で立派な人物になるやうにと言つて、別れを告げた。少年の眼にはいちらしくも泪が光り、「再生の御恩は終生忘れませぬ」と心をこめた言葉を残して、その姿はやがて闇中へ吸ひこまれて行つた。

その後十二年の歳月が流れた。

ある時、ジャンカー教授は和蘭の首都アムステルダムに用事があつて、暫らくその地に滞在したことがある。一日、或る銀行に金を受取りに行つてゐた教授の後から見知らぬ一紳士が入つて來

またなく信用を得ました。そればかりではございません。主人の令嬢からも愛されまして、間もなく此家の養子となり、今は當市に於ても、馬鹿がましい言葉ですが指折りの一人ともなりました。かく成功致しましたのも、再生の恩人たる先生の賜でなくてはなりません。先生、何卒、此家も此身も、また妻や子供たちをも、悉く先生の御一身に付き随ふものとして、永く此家に御逗留なさつて下さいませ」

と、泪を浮べ、心をこめての感謝であつた。教授の眼にも、よろこびの泪がキラキラと揺れ輝いた。教授は過去の一夜をゆくりなくも思ひ起して、

「あの時の少年が斯く成功されたか」と、互ひに手を把合つて、盡きない感慨に打たれたのであつた。

二、兩脚を失つて自ら知らず

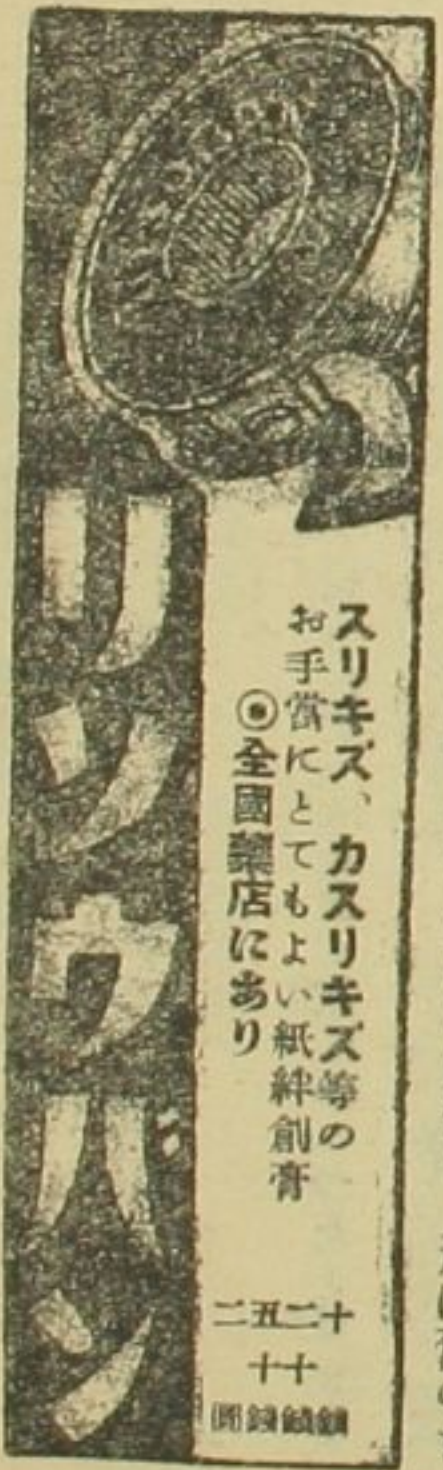
此の小話は、ジャーナル・オヴ・ナチュラリトといふ理學雜誌に載せられたのであるが、餘りに奇矯に過ぎて、信用しない人もあるかも知れない。けれども、話の中に出て來る患者は、ブリストル病院の外科醫リチャード・スミスが自ら治療を加へて、事實だ

といふ事を證明してゐるのである。

或る冬の夜、二人の旅人がさる旅館に一夜の泊を執つた。處が、その夜はとりわけ寒さが厳しく凍えんばかりなので、投宿するや否や煉瓦製の暖爐にふんだんに火を焚かせ、その上に冷え切つてゐる兩足を載せて、椅子に倚り寛ろいだのである。

するうちに、暖爐が次第に温もるにつれ、ぬくぬくと身内もけだるくなつて、いつとはなしに深々と睡りに陥つてしまつた。さうして、夜明けまで、死んだもののやうに、ぐつすりとして睡りほうけてしまつたのである。

處が、暖爐を形造つてゐる煉瓦が、火氣の加はるにつれて追々と熱して來て、遂には草臥れて前後も知らず睡つてゐる旅人の片足を全く焼き盡すに至つた。尤も急激にはない、徐々に熱が増して來たので、旅人は毫も之を感じずに寝入つてゐた。さうして翌朝宿の主人に起される迄には、其の半ばを焼失し、形は舊のまま



スリキズ、カスリキズ等の
お手當にとてもよい紙絆創膏
◎ 全國藥店にあり

二五二十
開封後

までもその實は全く石灰質と變じてゐた。のみならず、その時でさへ些しき痛みを感じず不幸を悟らなかつた旅人は、主人の入つて来た足音で遽かに目を覺して兩脚を煖爐から下さうとしたが、既に石灰と化してゐた足だからたまつたものではない。忽ち、粉粉に崩れ砕けて、哀れな旅人は床の上からがつくり倒れ落ちてしまつた。仰天した主人が慌てふためいて介抱したが、それでも旅人は毫も苦痛の色は見せないであつた。

主客ともどもに、奇異な感に打たれたが、そのまま放つては置けないので、最寄なるブリストン病院に入れ、前記リチャード・ヌミス氏の治療を受けた。かくて一時は快癒に向つたが、何分にも火氣が全體全部に及んでゐた爲に重體となつて、遂に絶命したといふ。

三、佛國文豪ラ・フオンテーヌの放心

文士には放心家が多いが、ラ・フオンテーヌも御他聞に洩れぬ大の健忘症であつた。

ある時、彼はその友人の喪に會つて、多くの人々と共に葬儀に臨んだが、その後僅か数日の中にその友の家を訪ね、昔のやうに

ぬけぬけと面會を求めた。面喰つた家族が「もう亡くなりました」と告げると、

「それは意外、ヤレヤレ」

といたく驚いた風であつたが、間もなく我にかへつたと見える。「成るほど、彼奴は死んだに違ひない。現に僕もその葬式に往つたらしいからな」と言つた。

四、ナポレオンの亂行

「ナポレオン・ボナパルト、ダムール」といふ書物は、ナポレオン二世の女色に關する暗黒面を完膚なきまでに暴き立てたものである。如何に彼の亂行が甚しかつたか、その中の一語の荒筋を此處に記してみよう。

埃及遠征中、ナポレオンは部下フリー大尉の細君で、際立つて容色の美しい一女性に戀想し、一夜彼女を酒宴に招いて、苦もなく感服を通じた。かうなると、良人の大尉がゐるは邪魔になる。何とか名目を拵へて、彼を本國へ歸すことにした。何にも知らぬ大尉は、命を奉じて軍艦へ乗りこんだが、この命令にはナポレ

たが、その紳士は、教授の姿を見るや否や突然言葉をかけた。「失禮乍ら先生はヘール大學のジャンカー國手では御座いませんか」

見ると、際立つて風采の立派な、人品卑しからぬ人物である。けれども教授には見覚えがなかつた。心中不審に思ひながらも、黙してゐる場合でないから、「仰せの通り、私はジャンカーです」と答へると、紳士は一入感歎に「唐突な御願ひですが、先生は私と食事を共にして下さいませんか」と言ふ。教授は益々訝しいと思つたが、學者らしい無頓着さから、又好奇心から、敢て拒むことをしないで、導くままに紳士の馬車に同乗した。

車は、間もなく、葉障らしく宏壯な邸宅の前で止つた。どうも紳士の住宅らしい。呆氣に取られ乍ら、促されるまゝその家へ入つて行くと、眩ゆるくらゐ綺麗びやかな一室へ通された。すると、美しく着飾つた夫人が幾人かの子供たちを伴つて現はれ、あでやかに微笑みながら、初対面の挨拶をするのであつた。

「これは一體どうしたことであらう。アムステルダムの人々は、外國の客を愛する癖があるのかしら。それに付けても、あの紳士が私の名を知つてゐたのが不思議だ——」

と腑に落ちないまゝに、今更引込みもつかず、教授は主人夫婦と世間話でもする外はなかつた。

するうちに、晚餐が初まつた。恐ろしく贅澤な御馳走である。食事が済むと、別室へ誘はれた。よく蒐められた美術品が、部屋

一ぱいに飾りつけられ、古代の花瓶には、香りの芳烈な花々が活けられてゐる。

さて、此の部屋に落着くと、疑問の紳士は一段と恭しく、「先生、貴下は私を見知つていらつしやいますか」と訊ねた。更に面識がないと、率直に答へた教授の前に、ぐつと一膝乗り出した紳士は、思ひもかけない事を述べ立てたのである。

「先生はもう御忘れであります。でも、私は能く先生を覚えてをります。イヤ、覚えてゐるだけではありませぬ、十二年の間一日と雖も先生の御恩を忘れたことは御座いません。何を隠しませう。私は十二年前、先生の御部屋で蘇生した一少年でございます。

あの時、先生の御情によつて、ヘール郊外で御別れ致しましてから、和蘭に逃れて暫らく経ちますと、運よくも此地の大商店の手代になれました。さうして、お別れした時先生から受けた御教訓を守つて、只管身を積み重ねて、數年の中には主人から、

丙子老録

(六)

養心

慢心

慢心ほど人の悪徳はない。諺に高慢の花は悪魔の庭に咲くとあるが、如何にも好箴である。全體慢心は利巧の人に少なく、慢心家は大慨愚物である。馬鹿と高慢は同根より生ずと云ふが、如何さま兄弟合であらう。或は云く自慢は馬鹿の行どまりで、展開のしようがない。段々自慢が募つてくると死滅に近い。蟻などは羽が生へると其姿は豪勢だが間もなく死ぬではないか。老子は言ふた、自から矜らず故に長すと。矜るものには進歩がない。見ずや稻の實の満ちたるは頭を低く下げ、實なきは昂然頭を擡げ居るにあらずや。古へより慢心は戒められてゐるが、實は自家の慢心を自身知らない人が多い。自分の缺點を棚へ上げて他人の高慢を指彈する人がある。それも道理、自家の慢氣を知るは、暗夜黒地の上を走る蟻を見るよりも難いと哲人が言ふたが洵に

至言である。

和歌漫涉

大隈言道の歌に「はきだめの塵の下なる芋すらも子は親にこそつきてありけん」とあるのは人の注意を逸する物を捉へた所に慧眼もあるが、倫常の至理を寓した所に味がある。加賀の千代の句に「手になりし垣根を倒す瓢かな」とあるは恩を仇で返すやうにも解されるが、生育の力の大なる青年の後世恐るべき意を寓したものと解し得らる。我邦の道歌は卑俗と露骨に失するので、歌人に忌まれるが此二首などは立派な道歌で、教訓を寓しながら卑俗に陥らない所に妙がある。川柳子は云く「俗名で呼ばば樂種は安くなり」と、豈營樂種のみならんや。普通誰れでも口にするを羅句語で云へば、警語だと傾聽するが、およそ羅句の死語を使ふ者は大馬鹿である。西洋でも羅句語を知らない内はまた馬鹿でもな

いと恕してゐる。我國で先生と呼ばれる、程の馬鹿でないと同一意である。

學名

學者が或る種の發明をすると、其學者の名を發明品の名とすることが學界の通例となつてゐる。これは發明者の名譽を表彰するもので、學者に與ふる勳章に齊しいものである。されば幾つもの或る學者の名で呼ばるゝものがあればあるほど其の學者の名譽となる譯だが、此の名の附け親に由つて名譽に等級がある。若し學界の大家が名づけ親であれば其名譽も高いが、門下生などが名づけ親であれば輕んぜらるゝ。宛かも某大國の勳章が誇りとなるに反して、劣等國の勳章が恥辱になると一般で、學名のつけ親が誰れかと一考する必要のあるのは此の故である。偶々丘濤次郎博士の隨筆を讀んで見ると、博士が發見した種名に丘の名が附されてゐるのが、七つあるさうだ

が、それが悉く世界の學界の大家が命じた名だとあつて、博士は左の如く云つてゐる。「種名に自分の名の附いて居ることを得意とする人があるならば、その人に對して、私は戯れに、僕のは悉く舶來の上等品ばかりで安っぽい和製のもの一つも無いと云ふてやる積りである」と。

銀座書廊

去る四月中銀座に漫歩を試みると、商店のショウ・ウキンドーに洋畫の額面が飾つてあつた。始めは何んの氣なしに見て歩いたが、どこの商店の窓にも一枚若くは二三枚の額面があるので氣がつくと、文展に反對の洋畫家が展觀の處を得ず、銀座各商店の後援で斯くしたのであると分つた。斯る事は初めてのことで一時の窮策から工夫したのであらうが、よい工夫であると思ふた。飾り窓には種々の商品が置かれてあるから、そこに額面があれば商品も自から發揮する。額面にしても置かるべき所を得た趣がある。文展の會場などでは幾十枚も幾百枚も並べて其間に間隔もないから、各個の畫か互ひに殺し合つて一向に發揮しないが、こゝは各店の窓を獨占して掲かるべ

き處に掲げてあつて互ひに冒すことがないから眞に額面の仕合である。私は銀座全部を畫廊とした處にも興味を感じた。

三圍の川柳

墨堤の三圍社に其角の祈雨の句があるために、川柳子は之を題として何百と云ふ句を詠じてゐるが、多くは其角をほめた句で中には秀句もあるが、其角をあしざまに罵つた句はないかと尋ねて見ると、それが又少からずある。それも其苦、降雨の爲め迷惑したのから云へば、其角をあしざまに云ふのは道理であつて、川柳の本領は寧ろほめるよりもケナス方にある。

三圍の手柄小賣は二合さげ

米屋から云へば米價が二合下つたと云ふ苦情がある。

あのヅクニフが其角かと米屋共

かく米屋は其角を罵つてゐる。米屋ばかりでなく乞食と云ふ一群も喜ばない。

其角の句宿なしばかり悪くいひ

藏前方面の門弟子が減つたと云ふも皮肉である。

夕立に藏前の弟子五人減り

他に苦情あるものは師や乾物を作る渡

世のものなどである。

梅干や干瓢の邪魔其角する

梅よ干瓢よと中の郷大騒ぎ

飛んだ雨だと瓦師は困つてゐる

葉がくれ

此頃「鍋嶋論語」がまた世の中に賣り出されてゐる。此書は山本常朝の説を中心として、武士道の挿話を編した佐賀の「葉隠」である、葉隠の本書は佐賀言葉で書かれた讀みにくひものであるが、要點は湛念和尚の殿様名號に盡きてゐる。

武士たる者は忠と孝とを片荷にし、勇氣と慈悲とを片荷にして、二六時中、肩の割入る程荷なふてさへ居れば、侍は立つなり、朝夕の拜禮、行住起臥「殿様く」と唱ふべし、佛名眞言に少しも違はざるなり。

とは簡單ながら葉隠説をよく道破してゐる。鍋嶋侍の名號は殿様中心主義で、此主義は事に臨んで利害を顧みるを非とし、武士道は死にも狂ひでなければならぬと教へてゐる。言は甚だ奇矯の如くであるが、打算は勇を挫くものに相違ない。一圖に死にも狂ひたれ、決死の覺悟をもとと云ふ

のも勇を武士道の第一義とするからである。私は前號に江戸ッ兒の任侠の源を尋ねて源平盛衰記にある、侍の送別會のことを引いたが「葉隠」にも似寄りの左の挿話がある。

江戸で旗本四五人が夜會棋を打つてゐたが、一人が便所へ立つた。其後で口論が始まり、一人が切られた時燈が消へた。便所からさきの男が馳出して「皆しづまつてくれ、何んでもないのだ、早く燈を」と言つた。再び燈がつき、人々は静まつた。と便所から出た男は、さつき人を切つた者の首をづばりと抜き打ちざまに切つて落した。あつと皆な驚ろいたが、下手人の言ふには「武運に見はなされた拙者、喧嘩の場になつた爲に、臆病者といはれ切腹は極つてゐる。便所へ逃げたなど云はれては辯解は出来ぬし、いづれにしても腹は切らねばならぬ場合だ。獨り恥をかいて死ぬよりはと考へたから相手を殺したのだ」と言つた。

臆病と云はるゝことが如何に辱恥であつたかを物語る挿話であるが、此事は將軍の耳に入つてもお咎めがなかつたと附記されてゐる。

兩雄趣味の遭遇

外國の挿話で自分の喜ぶやうな趣味談はめつたに無いが、此の頃ある雑誌で見た一話が稀れに會心を覺へしめた。それは米の前大統領ルーズベルトと英の故外相グレイ子爵との間に起つた趣味談である。ルーズベルトは大統領を罷めて、亞弗利加に獅子狩などをやつた漫遊の途次英國に立寄つて同國の小禽を見たいと、兼ねてより其の事を英國へ申込んだ所、當時外相であつたグレイ子爵が案内者は別に物色するに及ばぬ、自分が案内するとあつた。實はグレイ外相は趣味の人で、釣の名人であることは隠れもないが、小禽に就ても専門家跣足の造詣が深かつた。子爵は自信があつて案内を引受けたが實はお客のルーズベルトにどれほどの鑑識があるかを判じ兼ねた。愈々ルーズベルトが英國へ渡ると、此お客は百忙中小禽研究を忘れず、一日約の如く、グレイ子が先導して或る田舎に出かけた。勿論一人の従者も伴はなかつた。グレイ子は途中内々お客に退屈を來しはせぬかと心配したが、追々鳥聲を聴くに及んでお客は直ちにその鳥が何んであるかを判じ

たのみならず、小鳥に就てはあらゆることを該博に知つてゐるのでグレイ子を驚かしめた。ルーズベルトは鳥の歌を聞くに不思議な耳の所有者で、三四の鳥が一緒に歌つてゐても、一々それを區別することが出来る。初めて知つた鳥でも其聲を聞くと過たず、二度目にそれが何んであるかを言ひ當る位敏捷であつた。尤もルーズベルトの耳を感服させたのはブラックボルトと云ふ鳥でそれを大いに褒めた。この鳥は英國では左まで珍重しないものであるのに、歌がうまいと云ふてこれに折紙をつけたのである。政界の兩雄が全く政治を離れて別天地に一日趣味の遊びをしたことは類例のない出来事で、兩人は歸途に水に浸つてゐる道路をゾボンとまくり膝まで達する水を涉つたなどの椿事もあつたが、グレイ子が他日米國に赴いた時、ルーズベルトの母校ハーバート大學に講演を請はれた時、此時の事を説いたとあるが、誠に興味ある兩雄の遭遇であつた。

水戸浪士の首領格

關鐵之介捕縛の地

越後高瀬温泉と判る

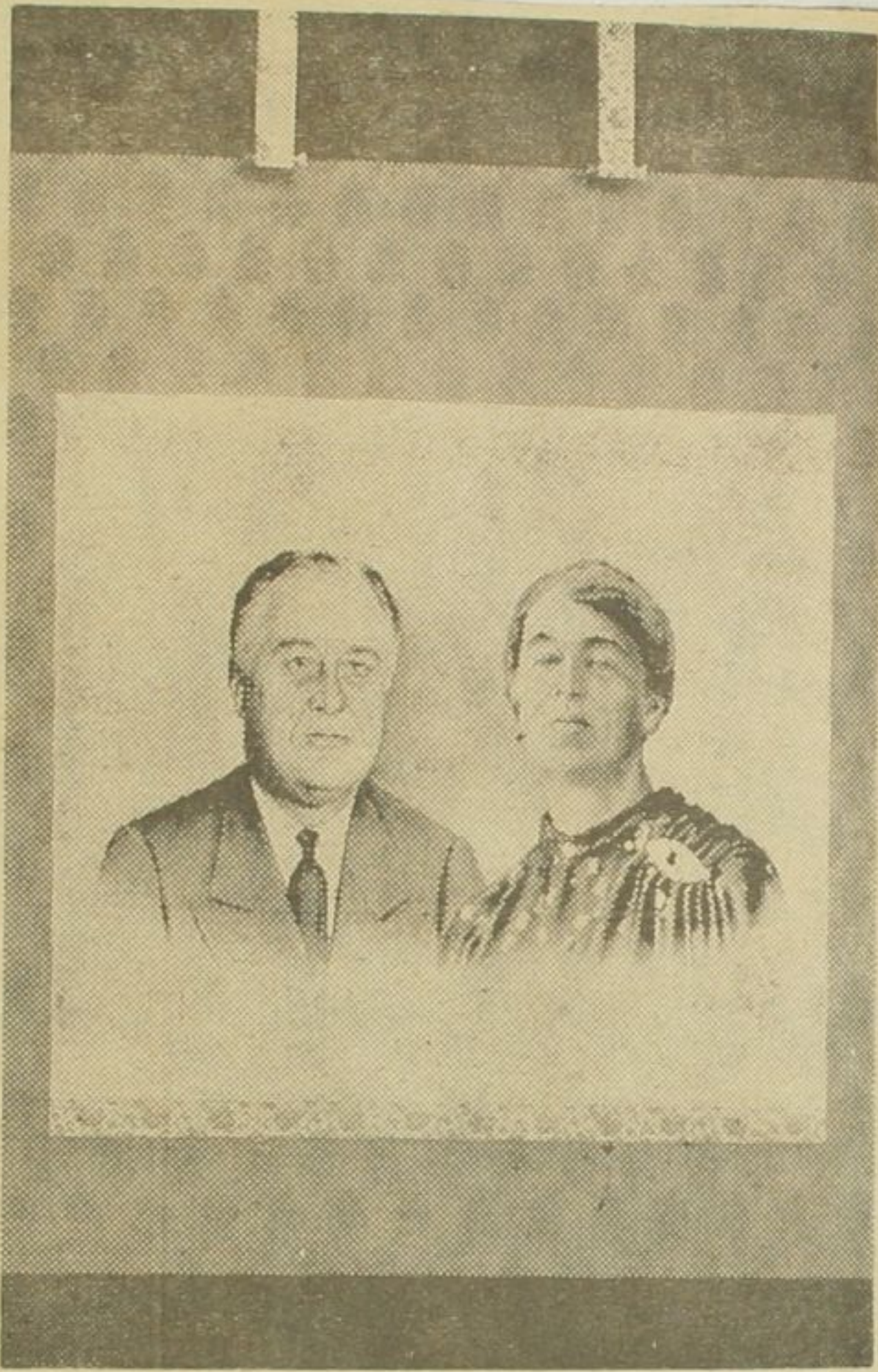
櫻田門事變 の秘話に世に



萬延元年三月三日時の「老井伊直」
 強の登城を櫻田門に要請した水戸
 浪士の一員、しかもその首領格で
 たる關鐵之介が捕縛されたのは岩
 船郡湯澤温泉松岳寺であると昔か
 らいひ傳へられ、松岳寺ではも
 ち土地の人々もそう堅く信じてゐ

「湯澤」に依つて湯澤温泉松岳
 寺捕縛説は全くの傳説で實際は
 高瀬温泉で捕縛された事が判明
 したので五月三十一日この旨を
 詳細手紙を以て關谷村佐藤泰造
 氏に通知して來た

去歲辛酉十月念三夜、予於北越
 上關村雲母温泉就因同十一月七
 日薄暮下赤沼獄……
 とあり、なほ述懐して
 三坂までかゝるつゞれの旅衣、
 ぬぎもやられぬ身の行方かな
 雲母温泉は高瀬温泉の別名で昔は
 主に雲母温泉と呼んでゐたもので
 あるといふが、この日及び述懐
 の和歌によると關鐵之介は「大老を
 暗殺し逃ぐ幕府の眼の国かぬこの
 地に清伏、無名の一浪士として天
 下の形勢を窺ひ第二の計畫をたて
 たる」ところを捕縛されたもので
 あるらしいが、高瀬温泉では斯く
 定づけられた以上關鐵之介の陣を
 建てやうと計畫してゐるが湯澤温
 泉捕縛説も又一片の荒唐無稽の物
 でなく高瀬温泉即ち雲母温泉と眼
 と鼻の間である處からこゝにも潜
 伏してゐたこともあつたであらう
 と思はれる(寫眞は關鐵之介の遺
 墨、關谷村下關佐藤佛造氏秘藏の
 もの)




米大統領夫妻に墨繪を贈る

ナ夫人をお擁ひで純日本風の墨繪に描き幅二尺縦一尺五寸の絹地に收めて本仕立の金襴の表
 装をした珍しい掛軸が當の大統領夫妻に贈呈される繪も見事で表装の日本趣味の調和も良く
 珍しく始めて毛筆で肖像を描かれた大統領も大ニコニコで受けるに違ひない出来栄だ。これ
 は國際女子親善協會からの贈り物で筆者は宮久保英雄氏、長さ三尺の桐二重箱に收めてある
 同會から日米親善のため派遣される女性文化使節團部幸子嬢(こ)は東京市長より米國各市長
 へ贈るメッセジ各女學校メッセジ等と一緒にこれを携へ十一日午後三時横濱出帆の秩父
 丸で渡米の途につく(寫眞は米大統領へ贈る掛軸)

六

茶を園を特



茶を園を特

一十和昭 (可麗物便利種三第) 【六】

この村はツファアなどを買ひこ
んで手具屋引いて待つてゐるが
こゝに困つたのは折角の賓客に
使つて貰ふ

この村はツファアなどを買ひこ
んで手具屋引いて待つてゐるが
こゝに困つたのは折角の賓客に
使つて貰ふ

(西洋便所の) ないことだ
そこで村役
場では應々
遣い旭川まで人を派して買はせ
てやつたが無いので、遂に北海
道には西洋便器は一つもないと
断定し便器建設會社を開き、大
工を列車に乗せて寸方、型をと
らせて、いま木製便器を一生懸
命つくつてゐる

京大野田、竹中、荒木(健)官本
荒木(九)の五氏は飯後十二米の小
型東北米に部分食とコロナを
撮影する熊野九・七米の寫眞機一
台とスペクトル、フラッシュメ
ートル用分米器の携行を終り毎
日夜空の月星などを撮影して十九
日の二分間の黒面を待つてゐる、
準備の出来たこの一行の退屈を
めるために本年二月札幌と青歩に
出てつかまへられた一歳の牝馬、
浦精アンと呼ばれてゐる

(子熊を一行) の宿所女子
寮の寮長
前には放し飼ひにして置かうと北海
道らしい趣向を村民が設けた、
はかなかつた四十年前の十食團
を知る枝幸町の古老陸貨商藤市
三郎(じさん)と金物師高木(たかき)
さんは熊鷹(くまが)に當日を回想しな
がら語つた

兎に角四十年、私達は博士連が
鐵道のない時で船で當地に来る
までは日食なんて何のことか判
らなかつたのです、この枝幸は
雪だけの四月から六月までお天
氣はよく、六月から八月まで濃
霧がかかるので、四十同前の
あの日は朝から素晴らしい同快
晴でしたが日食の時太陽が三日
月形に缺けた瞬間に霧がかかり
遂にコロナだけがとれたなかつた
のです

(近年人間) が増へた譯では
ないが濃霧が少
なくなつた、今
度こそはなんと京大の方々に
十分な團測の出来る様にお天氣
になればよいと祈つてゐます

藤原製



(一十四のそ) りぐ必齋書

トツト博士を迎へて

想 起 四十年前

北海道枝幸にて同盟特派員發

日食觀測

來る六月十九日の「黒い太陽」に科學の眼がらつまる、東の上斜里が(日食國際觀)の枝幸は北の枝幸はまた四十年前の思ひ出の國際觀測場だ

明治二十九年此處を通過する皆日食觀測のため通々訪れた紅毛人の米國アマスト大學教授ダビット・トツト博士夫妻、重疊アルヂューに搭乗して訪れた佛國天文學者アシユ・デラン博士連の一行に隨つて

感慨深し新銳科學陣

村民連で今年迎つてゐるものは十名たらずだがその頃枝幸(アマスト)で昆布の採れる處は僅か三百戸足らずの漁村だつた

當時トツト博士は海岸にデラン博士夫妻は現在の小学校の處に觀測所を設けて手ぐねひいてゐたのだが残念ながら當日は雲に遮られて見えず

(半歳の準備)が水産に關した博士夫妻が觀測小屋の建てかけつて位

いた悲しい光景も枝幸の名とも忘れられないことなのである、トツト博士は歸國に際し二箇年に五箇の觀測小屋を村に寄附してゐたが惜しいことに二十年後には焼けてしまつた

村民連の目には朝夕静かに道通するトツト夫人の美しい姿が強く印象づけられ一方デラン博士夫妻を護衛して來た佛國水産博士の娘を追ひかけまはして仕舞なかつたが「お歸馬」の有夫の女は少しも手を出さなかつたこと

は今も村の語り草となつてゐるトツト博士は歸國後枝幸小學校に洋書九百七十七、和書三百二十一冊を寄附して親切だつた村民の厚意に報ひたがこれは「公立枝幸圖書館」として半世紀前のいま枝幸村の自慢の一つだ

(二十九年後) 凶作とて漁業がさうになつたこの枝幸村は地質學者だつた美しいトツト夫人の「借金を出す」といつた言葉を思ひ出して探検をはじめ遂に北緯四十五度の枝幸はゴールドラッシュを捲き起して今日の戸數二千七百八十戸、人口一萬二千二百二人の北邊では可成り大きな村となつた、かうした歴史を持つ枝幸は再び訪れる暇しい日食に他のどこよりも熱をあけて大騒ぎだ

この村はツファアなどを買ひこんで手具懸引いて待つてゐるがこゝに困つたのは折角の賓客に使つて貰ふ

(西洋便所) ないことだ、そこで村役達では應々速い旭川まで人を派して買はせにやつたが無いので、遂に北海道には西洋便所は一つもないと断定し便器建設會議を開き、大工を列車に乗せて寸方、型をとらせて、いま木製便器を一件懸命つてゐる

京大教授、竹田、荒木(健)宮本、荒木(五)氏は海拔十二米の小学校東北角に部分食とコロナを撮影する焦熱九・七米の寫真機一臺とスペクトル、フラッシュ、カメラ用分光器の携行を繰り返り毎日夜空の月星などを調整して十九日の二分間の黒面を待つてゐる、準備の出来たこの一行の退屈を慰めるために本年二月號誌と歩に出でつかまへられた一歳の北(通稱「アン」)と呼ばれてゐる

(子熊を一行)

の宿所女子實科學校の前放し飼ひにして置かうと北海道らしい趣向を村民が練した、はかなかつた四十年前の「日食觀測」を知る枝幸町の古老隆廣(隆廣市三郎)さんと金物師廣木忠(さん)は感慨深げに當日を回想しながら語つた

兎に角四十年、私達は博士連が鐵道のない時で船で當地に來るまでは日食なんて何のことか判らなかつたのです、この枝幸は雪どけの四月から六月までお天気はよく、六月から八月まで濃霧がかゝる處です、四十年前のあの日は朝から素晴らしい同じ快晴でしたが日食の時太陽が三日月形に缺けた瞬間に霧がかゝり遂にコロナだけがとれたかつたのです

(近年人間)

が増へた譯ではないが濃霧が今度こそはほんとに京大の方々に満足な觀測の出来る様にお天氣になればよいと祈つてゐます



氏一萬九口垣

新聞

我郷土色 二十村の闘牛

今年の初土俵入り

古志郡二十村に行はるゝ牛の角突きは古い傳統を持つものであ

は二頭共に優良の取組ならむ
二番目 間内平松之助(若松)

で如何にも熱戦した観さばきなり
りさて相方立上るや政吉一氣に
押突き花立フイを喰つて立ち返
さんとするが第一驛に機先を制
せられて次第に後込み遂に土俵
を制り政吉の勝ち
(評)花立牛は氣質温順過ぎる
かと思ふ
△三役 小結
六番目 荷領仙蔵、荷領權左衛
門、相方共に小結の貫諱はあり

標原製

つて今は彼のスペインの闘牛と共に世界的存在とまで云はれるが
併もスペインの闘牛の如く有眼、貴族階級の殺伐極まる觀奇とは
違ふ、そこには農村の行事として温かい人と畜牛との交際がある
角突きは殺伐どころか牛は我が家族の一員であり子供である、
それ故、飼主の牛に接する態度は肉身と同じで決して馴順だなど
との感じを起させない斯くて角突きは我々の草刈角力と村芝居に
等しい出場の爲め祝ひの歌々が囃られ人と牛とは渾然一体、山
の賦間の土俵を踏むのである左は去る二十日に行はれた今年最初
の角突きで先づ瀧踏みといふところである

角突き見物記

廣井 仲 藏

五月二十日由古志名物牛の角突
きを見る、場所は東山村大字小
栗山稲場の角突き場、此處は數
年間休場して畑地となつてゐた
のだが本年青年會が努力復舊し
たものでこの日は本年最初の一
番角突きといふのだ出場数は荷
領十頭、竹澤六頭、浦野二頭、
小栗山二頭その他馬喰牛六頭、
計二十六頭
闘牛委員長 廣井 廣、青年會長
廣井健太郎
開場午後三時
△初切

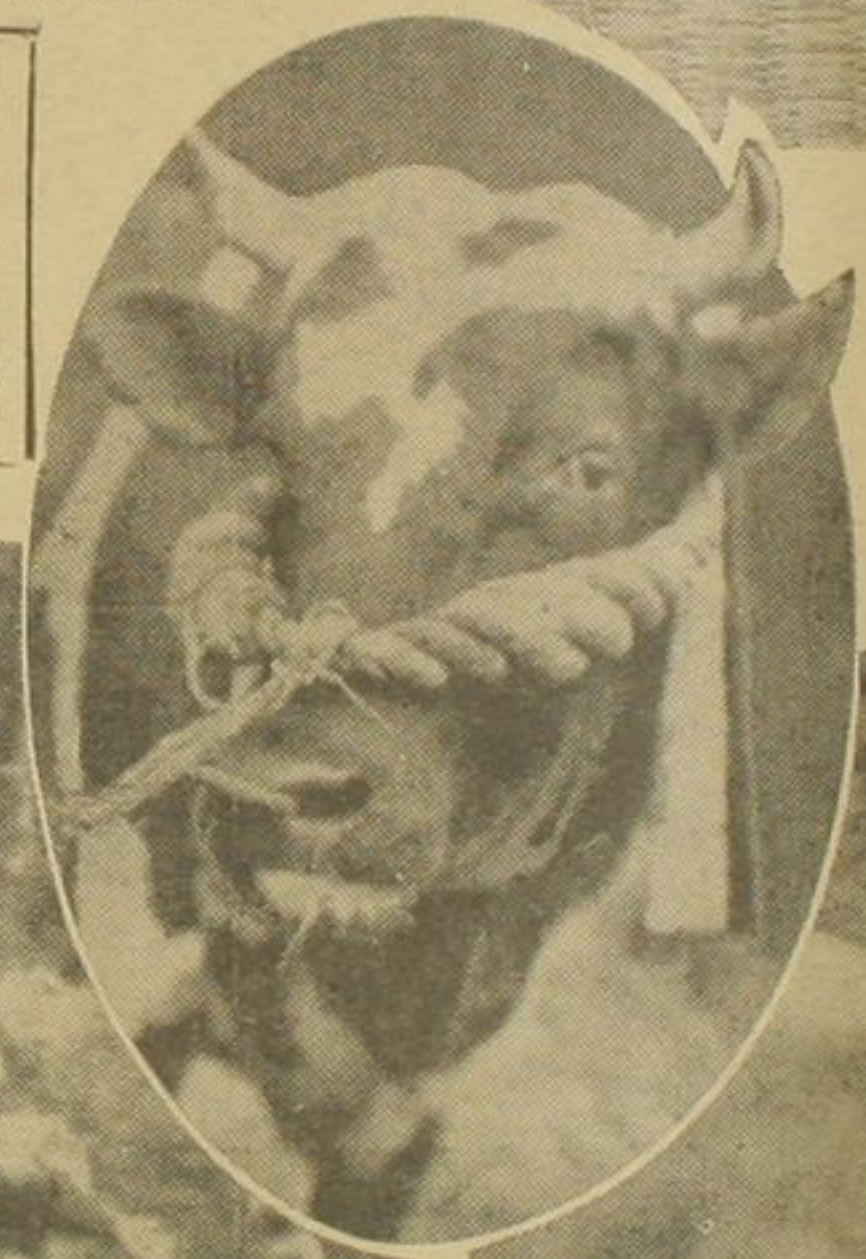
荷領布場(布引)松之助先に仕
掛け一押し押したるも布場よく
こらへて相方共に妙技を盡し勝
負なし引分けとなる
(評)布場少し角質の氣味
三番目 荷領喜一郎(豊春)間
内平利右衛門(丹頂)初め相方
ともゆるくあしらつたが利右衛
門一氣に押ししたるに喜一郎を
ひねつて立ち直し能くこらへた
が利右衛門又も押し攻勢の位
置を替す突撃したる爲め喜一郎
タヂ／＼として能くこらへたが
遂に押し切つて利右衛門の勝
(評)何れも後日小結に昇進の
望みあり
四番目 岩間木中村(ハヤブサ)
竹澤六松相方老年組の勝負とて
入念に仕切つて睨み合ひ中村如
何なる隙を見出しけん一氣に押
し六松もさるもの大に踏ん飛つ
たが機先を制せられて後とじさ
りするを中村は進二無二押し手
の一方遂に大松たまり兼ねて逃げ
出して中村の勝
(評)老年牛は斯くの如き習は
しとして仕方なし
五番目 小栗山花立、中之澤政
吉相方の持主の牛の場内引廻し
その他観のさばきはうまいもの

やと睨み合ひ權左衛門より仕掛
けたるに仙蔵これを受けたるも
權左衛門すかさず仕掛け仙蔵
受身となつて先づ權左衛門六
分、仙蔵四分と云ふ角突きであつ
た
(評)仙蔵は体格も目方も申分
ないが攻勢に出なかつたのが惜
しい
△七番目 小栗山庄左衛門、十二
平四郎兵衛、相方鼻繩抜くや否
や四郎兵衛猛然突撃一押しに押
しひた押しに押出さんとしたる
も庄左衛門能くこらへて應戦し
引分となる
(評)大關に昇進有望
△八番目 岩間木三十郎、竹澤水
杯、相方仕切立ち上るや否や三
十郎一押しに押し切つて三十郎
の勝ち打出午後五時
(評)相方の牛方仕切りに相方
の習熟あり過ぎ五間以上もあり
水杯の牛は未だとばかり悠々と
して居たに三十郎素早くすきを
見て權腹に飛び付きつゞけ權に
權腹を突き水杯この攻勢に堪ま
り兼ね逃げ出したのだ、これは
春初めの事とて人も牛も餘り悠
長過ぎたる感みがある。



人村(上右) 繪圖逐角牛闘

ツガ【下右】淡陣出の浪花立てれら透見に
待を陣出【上左】兩たん組取につ四リチ
【下左】門工右利るす腕闘【下中】頭つ
右 援軍にり頼衆良 景光るま話息に正
カ 闘門工左権村同は左 闘敵仙頭商は
牛木るみ刊に戯遊の供子はトツ



顧若波 水墨山水圖 (紙本條幅)



東京 河合龜太郎氏藏

顧濤、字は若波、雲壺と號し吳縣の人である。四王吳惲等諸名家の長所を攝取し、以て一家の境を開拓した人で、筆技秀逸、
氣韻清麗、得意としたのは山水であつた。明治二十年頃に來朝したが、來朝の支那人中最も秀れた人であつたと傳へられてゐる。
本畫は門人の井村常山に書き與へたもので傑作とも云ふべきものである。



